書評

No. 55
1981. 4

特集●新入生へ贈る

今読むべき本はこれだ／石尾芳久他
文学の森に分け入る前に／工藤精一
講演会記録 裁かれる大学／五十嵐良雄
連載 研究余滴 ボードレール／山村嘉己他

書評編集委員会

書評／55号　1981/4

羅針盤		1
特集	新入生へ贈る ——今読むべき本はこれだ——	4
	石尾芳久（法学部教授）	5
	山川雄巳（法学部教授）	6
	松岡　保（経済学部教授）	6
	田宮　武（社会学部教授）	8
	竹内　洋（社会学部助教授）	9
	小原　仁（社会学部専任講師）	10
	吉田永宏（国文科助教授）	12
	田中欣和（教育学科教授）	14
	鍛治邦雄（商学部専任講師）	15
書評	「文学入門」(山村嘉己著) 文学の森に分け入る前に　工藤精一	18
講演記録	「裁かれる大学」　五十嵐良雄	24
連載	—研究余滴—ボードレール3 ボードレールの散文詩とパロディ　山村嘉己	36
	日本中国 言葉の来往 その4　芝田　稔	42
	北京で生活して（三）　鳥井克之	48
	差別落書問題をめぐって（3）　田宮　武	56
	ポーランド——その歴史と風土——その一　松川克彦	70
新刊案内		74
書評・バックナンバー掲載論文一覧		76
お知らせ		78
編集後記		80

表紙・カット／集英社刊『現代世界美術全集13・クレー』
講談社刊『世界のグラフィックデザイン2 ポスター歴史編』
題字／文学部教授　網干善教氏

'81.4 羅針盤

『ぼくは二十歳だった。それが人の人生でいちばん美しい年齢だなどと、だれにも言わせない』ポール・ニザンは自伝である「アデン・アラビア」の中でこう言っている。といっても、おそらく多くの新入生の諸君は、ポール・ニザンという名前すら知らないのが現実ではなかろうか？

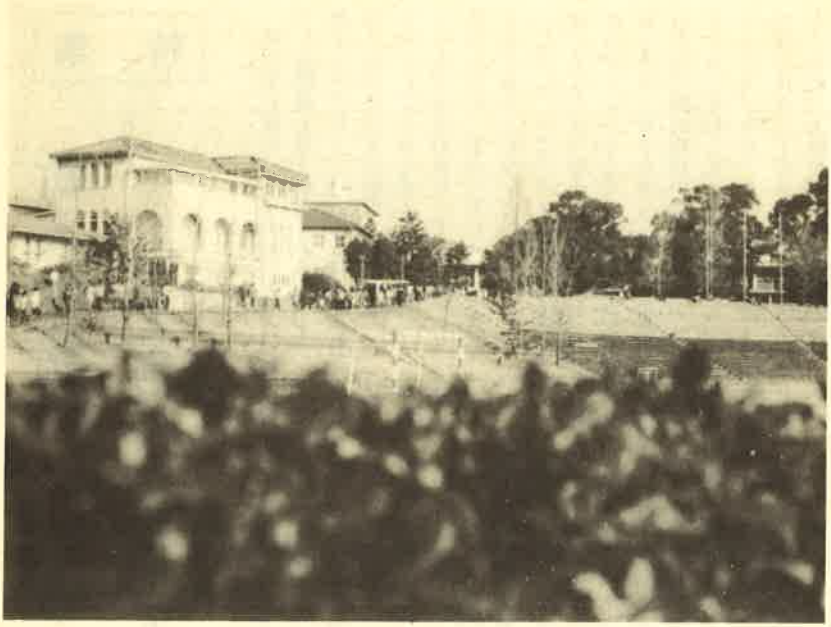
君達にニザンについて語るつもりはない。ニザンの生き方を知って欲しいだけなのだ。ポール・ニザンは一九〇五年、フランスに生れ、一九三〇年代にフランスの代表的なコミュニスト知識人として活躍した。その後モスクワで開催された革命作家会議やパリで開かれた文化擁護国際作家会議等に参加し、一九三六年にはスペイン革命戦争にも特派員として参加している。しかし、一九三九年には独ソ不可侵条約に反対してフランス共産党を脱党し、レジスタンスに一兵士として加わり、自ら銃をとりナチスと闘った。そして、一九四〇年、ダンケルク撤退の際、激烈な戦死をした。これがニザンの人生だ。

ニザンはコミュニストになり、コミュニストであることを止め、孤独に死んだ。この生涯は毅然たる妥協の拒否によって説明される。というのもニザンは反抗によって革命家になり、革命家が戦争に譲歩せねばならなくなったとき、ニザンは激烈な自己の青春を再び見出し、反

抗者として終ったのだ。つまり、仏共産党の党員としての地位も作家としての国際的な名声も一切を捨て去って反抗者として終ったということだ。だからこそニザンはこう言うことができる。『怒りを向けよ、君らを怒らせた者どもに。自分の悪を逃がれようとするな。悪の原因をつきとめ、それを打ちこわせ』と。

ニザンの言葉は若く、きびしい言葉だった。しかし、これを老いさせてしまってよいのであろうか？（付け加えるにポール・ニザンという作家はサルトルによって評価されたもののフランス共産党は未だに彼を認めようとしていない事実だけを語っておこう。）

夢をいっぱい(?)胸にふくらませて関大に入学したであろう君達に、入学おめでとうも言わずにポール・ニザンの生きざまを語ったのは、現代がそれほど夢のある時代ではないからだ。小学校、中学、高校と管理体制は強化され、それがごく当り前のこととなっている今日、校内暴力や家庭内暴力はむしろ当然として起り得ることであるにもかかわらず、それがまるで『異』なることとしてとらえられている。社会的な管理体制が強化されればされるほど逆に人間の精神的抑圧は強化され、様々な形で爆発するのは自然の理である。とすれば、この解決の道は二つに一つしかない。一つは抑圧のなくなる社会を



建設することであり、他の一つは、抑圧をごまかして違う形でこれらのエネルギーを国家目標にすりかえてしまうことである。いうまでもなく、後者は第二次世界大戦で日本帝国主義が辿った道である。君達はどちらを選ぶのか。

決しておおげさに語るつもりはない。しかし、世界の現状を見て日本の社会的な現状を見れば、一九三〇年代の後半と一九八〇年代が、より現代化されているとはいえあまりに酷似していることに気がつくであろう。ソ連は三年連続の農産物の不作に悩まされ、結果としてポーランドに問題が発生した。原因は明らかでソ連国内の穀物は家畜に食わす飼料すらなく、その家畜までも食べているのが現実だ。ポーランドに輸出する肉などありはしないのだ。米国とて同様であり、中国も然りである。食料の80%を輸入に頼っている日本はどうなるのか？ それは語るまい。ただ、ニザンよりもごく市民的に考え行動し、ニザンよりも社会的な死を迎えた兄妹がいたことを記したい。ハンス・ショルとゾフィー・ショル兄妹はナチス青年団で成長したにもかかわらず、美しい民謡を歌うことや名作の文学を読むことが禁止されていることに疑問を持ち、戦争反対を唱えナチスに処刑された。兄ハンス25才、妹ゾフィー22才であった。（詳しくは未来社刊『白バラは散らず』）ドイツの大学には『ショル兄妹広場』がある。(F)

特集

新入生諸君に贈る

——今、読むべき本はこれだ——

新入生の諸君、入学おめでとう。何回聞いても陶酔感を誘う言葉であろう。すべての足枷からのがれて、いわゆる自由な世界へと飛翔するまさにその瞬間を目の前に、いやもう手中にしていると考えているのだから。おいしいものを目の前にしている今、どんな言葉を呈しても、左から右へと通りぬけていってしまうかもしれない。

しかし、ここで考えなければならないことは、ここで言った自由な世界への飛翔とは何なのかということだ。英語の単語や慣用句を覚えたり、数学の微分、積分の計算問題を解いたり、源氏物語の文献からのがれたことだろうか。それとも、親の監視からのがれて、マージャンをやったり、酒を飲んだりして遊びほうけることだろうか。もちろんこういったことも、大学生の一つの特権だろう。が、これは飛翔でなくて逃避である。飛翔とは、あくまでも飛びたってより高い所へ、より真実に近づくことではないだろうか。

諸君は、熟考し、再考したりする時間を十分持っている。ここで立ち止まって、過去をふりかえって、自分が受けてきた教育というものがどういうものだったのか、いかにして受験という極めて異質な形態が正当化され、自分自身を巻きこんでいったのかを考えていくのもいい。あるいは、人生とは何なのか、自分が生きているということはどういう価値があるのだろうかと疑ってみて、文学、哲学書を読みあさるのもいい。現実を直視して、素朴に何故？という疑問を抱いて、極めてラディカルに行動するのもいい。すべては飛翔へ向う一手段である。

ここまでくると、私たち書評編集委員会が新入生歓迎号の特集を組んだ意図はおのずとわかっていただけるだろう。真実に勝るものはないのだ。見せかけの真実は虚妄よりも悪質である。状況に流されぱなしで、常に受け身で、大衆操作されているとも知らないのも愚かしい。体制の傍観者ではだめなのだ。体制の批判者となれ。

ここで組んだ特集がすべての新入生の開眼の契機になれば幸いであるが、次号からも諸君に極めてラディカルな問題をぶつけていきたい。

なお、各先生方へは、次のような質問事項に答えてもらう形で、執筆願った。

1. 新入生に対してどういう推せん図書をあげるか？
2. その図書を推せんする理由。
3. 新入生に対して、どういう読書姿勢を望むか。
4. その他新入生に対して何でも。

■石尾　芳久（いしお・よしひさ）〈法学部教授〉

1 マックス・ウェーバー著『法社会学』

2 本書が単に法に関する社会科学的研究のみならず権力問題についても洞察を示す著作であることは、今更、説を要しないであろう。本書について二十数年前、私は未熟な訳書を公刊したことがあるが、最近世良晃志郎氏によってすぐれた訳が公刊されている。新入生諸君には世良氏訳をおすすめする。本書をひもとかれた諸君は、あるいは、その難解さに驚かれるかもしれない。しかし、ウェーバー独特の重層的論理構成という思考方法を会得されたならば、本質上極めて明快な内容であることを理解されるであろう。本書は、むしろ四年間かかって折にふれて読むというようにして読んでほしい著作なのである。読むたびに前回には気づかなかった新しい思想の泉を発見されるであろう。実は、古典というものは、そのようにして我々にたえざる感動を与えるものなのである。本書は、支配体制と裁判制度との適合的関係を鋭く指摘するところがある。現代でも刑事裁判における自白をめぐって周知のように様々の問題が起っており、刑事裁判の合理性があるいは皮相な合理性ではないのかといった疑念をもつことが屢々あるが、そのような刑事裁判のあり方が現代日本の支配体制や日本資本主義の特色と必然的な関係にあるのではないかといった問題関心をもつにいたることが多い。このような問題関心に原理的に答えてくれるのが本書である。本書をひもとく時、ウェーバーが、法廷闘争に重大な関心をもっていること、活発な法廷闘争をなし得るような社会を開かれた社会として、これをなし得ない社会である閉じられた社会から区別していること、閉じられた社会こそ専制主義の支配の社会であることを正確に論証していることに、注目されるであろう。ウェーバーは、何故このように法廷闘争を重視したか。それは、ウェーバーが、法廷闘争について、不当な権力の行使を拒否する階級闘争の原型であるという意義を認めていたからである。しかも、単に拒否するばかりではない。法廷闘争を通じて、そのような日常的な理性的な戦闘の情況のなかで、人民が、新しい法、新しい時代をきりひらく先駆的な政治組織を発見し得るのであることを、法の歴史的発展に即して証明しようとしたのである。その意味で、本書もまた、すぐれた階級闘争の書であるということができる。現代の我々は、閉じられた社会へむかう曲り角に直面しているような感があるが、このような時代にこそ、本書を読むことによって、

勇猛心をふるいおこさなければならぬことを確信する。

■山川雄巳（やまかわ・かつみ）〈法学部教授〉

1 ジュディス・N・シュクラー著／田中成明訳『リーガリズム——法と道徳・政治—』岩波書店、一九八一年刊

2 本書は、法律家や法学者のたちいりやすい欠点を指摘し、批判したものとして有名な本である。著者は、現在、ハーヴァード大学教授として活躍している女性であって、女性らしい感受性と平衡感覚が本書でもよく生かされている。

少し難しい本かもしれないが、とくに法学部の学生諸君に一読をすすめたい。

3 （自分の読書姿勢について）自分の専門分野の文献は網羅的かつ系統的に消化するようにしているが、これは研究者として当然のことである。最近は、専門外の本を読む時間が少なくなっているが、歴史小説の類はつとめて読むようにしている。

4 世の中には本に書かれていないことがいくらでもある。本から得られる知識はごく限られたものであるといえないこともない。しかし、良い本は社会の文化的共有財産として貴重なものであり、それを読むことによって得られるものは、やはり大きい。少しずつでよいから、読書をつづけてほしい。

■松岡保（まつおか・たもつ）〈経済学部教授〉

1 荒畑寒村著『寒村自伝』（岩波文庫他）

2 大学に入って、教科書、受験参考書の類とはちがった、多少ともまとまった、しかしそれほど固苦しくない本を読んでみようという気持になられた諸君に、わたくしが薦めたいものとして、各種の伝記、ことに自伝がある。

わたくしたちの置かれている諸関係、諸条件——決して「白紙」ではないそれらを、肯定的にせよ否定的にせよ、まず理解する上で、それらが形成されてきた歴史的諸過程を振りかえることの必要性を、いまここで正面から論じる気持はない。というよりも、各種の伝記、なかんずく自伝は、その必要性を、各々その時期を生きた生生しさを通じて、わたくしたちにひしひしと感じさせてくれることが多いといってよい。なによりも、歴史的諸条件とそこにおける人間の生き方とが、身近かに、強く印象づけられるからであろう。

そうした意味で、J・J・ルソー、J・S・ミル、ロ

バート・オーエン、ア・イ・ゲルツェン、ヴェーラ・フィグネル、ペ・ア・クロポトキンといった人々、さらには大杉栄、河上肇といった人々の自伝が、専門との関係もあってすぐに頭に浮んでくるのであるが、どれか一冊となると、荒畑寒村氏の『寒村自伝』を、関西大学に入学された諸君にはまず薦めたい。

荒畑寒村（本名勝三）氏の名前を、なにと結びついて最初に印象に止めるか、そのこと自体、一つの歴史と時代を反映しよう。近いところでは、昭和五〇年年頭の朝日文化賞の対象者としてであったり、或いはそれに先立つ東大自主講座公害論への登場や、『谷中村滅亡史』の再刊を通じてということもあり得るし、古くは大逆事件の刑死者、管野すがの愛人としてということもあり得よう。『ロシア革命運動の曙』の著者として記憶にとどめる人、モルガンの『古代社会』の訳者として出会った人もあり得よう。わたくし自身についていえば、社会党代議士として、というより社会党からの脱党（昭和二三年）によって氏の名前を意識した年代である。そして、時期により時代により、氏の一般的な知名度と知られ方とが相当に変化したことは否定できない。

しかし、その中で、氏自身の生き方は、社会主義者として一筋、波乱に富むその生涯はそのまま明治から現代への歴史の生き証人である。里子、遊廓の幼少時代は明治の風情をしのばせるし、高等小学校卒業後の外国商館

書評編集委員募集！

●文化・思想運動に興味を抱いている方
●雑誌の編集作業に興味のある方

ガイダンス随時やっています。
なお、委員には活動を保証すべく、若干の活動費が支給されます。

生協本部3F組織部内
書評編集委員会

のボーイ、海軍工廠の職工、そして堺、幸徳秋水の『万朝報』退社の辞に社会主義者へというその過程は、洗礼の件ともども、当時の青年の生活と心情を伝えてくれる。足尾銅山、大逆事件とのかかわり以後の諸体験――ロシア革命と米騒動、第一次共産党の結成、ソビエト・ロシアへの潜入から第二次大戦後の社会党脱党を経た現在までのその歩みは、本書を追っていただきたい。それは同時に、明治十九年にはじまる本学の歴史と重なり合う時期であることに気がつけば、本学の歴史と時間にも親しみと身近かさを感じようというものだ。

版本は数種、それ自体歴史をもつが、現代では岩波文庫（青帯）上下がもっとも新しくて安い。

■田宮　武（たみや・たけし）

〈社会学部教授〉

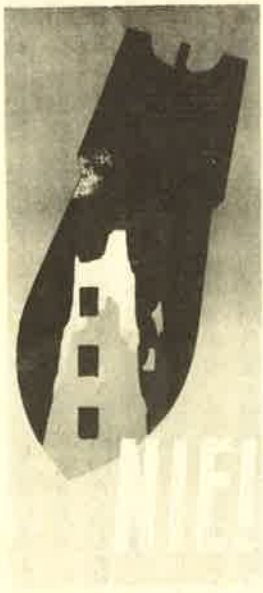
1 『朝を見ることなく――徐兄弟の母　呉己順さんの生涯』（呉己順さん追悼文集刊行委員会、一二〇〇円）

八木晃介著『反差別メディア論―新聞記者として』（批評社、一八〇〇円）

2 私は部落問題をはじめとする差別問題についてずっと関心を持ちつづけてやっていけたらと思っているので、最近読んで印象に残ったり、感銘を受けたりした本も自然とそうした内容のものが多い。

追悼文集といえば、美辞麗句を並べたてていて手にとる気にもならないが、『朝を見ることなく――徐兄弟の母呉己順さんの生涯』（呉己順さん追悼文集刊行委員会、一二〇〇円）は、一人の在日韓国人女性の生き方と考え方をとおして、朝鮮の南北統一への願いを知ることができて、大変教えられた。

もう一冊は、毎日新聞記者の八木晃介の『反差別メディア論――新聞記者として』（批評社、一八〇〇円）である。八木記者の『差別の意識構造』（解放出版社、一五〇〇円）は、マルクス主義理論に社会心理学や民俗学の成果を接木しようとした理論書で、かなり難解であった。それに比べて、『反差別メディア論』は書名こそいかめしい感じだが、内容は自分が新聞記者としてこの十年間に取材していて、とても具体的でわかりやすい。八木さんという



一人の新聞記者の眼をとおしてとらえられた、部落差別、在日韓国・朝鮮人差別、障害者差別の実相と解放への動きが生き生きと伝わってくる。また、一人の人間として差別問題に取組むとはどういうことかを示唆してくれる。

3 私はどちらかといえば本を読むことよりも本を買いこむことの方に関心が強くて、ずいぶんと新本・古本を読んでみようと思って入手するが、実際に読むのはそのうちせいぜい二割ぐらいか。一貫した読書方針はなくて、差別問題に関係ありそうなら、雑誌の記事、単行本から子どもの絵本まで読むように心がけている。絵本といえば、吉村敬子さんという車椅子を使う障害者が書いた、『わたし　いややねん』と『ゆめのおはなし　きいてェなあ』(二冊とも偕成社)からは、人間らしく生きたいという障害者の願いが伝わってきて良かったと思う。

専門のマスコミ関係の書物ももちろん読むし、ルポルタージュの類いにも目を通すが、あとになって引用・参考にすることを考えてできるだけ内容に関するメモを残すようにしている。これは私のような物忘れにとってなにかと便利である。

4 私の長男が現在高校二年生なのだが、おそろしく読書体験の貧しい子供で、次男の小学五年生が図書館から借りてくる星座の本とか、鉄道の図鑑とか、田河水泡の「のらくろ」の類いの本にしか目を通さない。こんな状態で、他人の子供の新入生に注文やら要望を出すのも気恥しいが、あえていうと、できるだけたくさんの「まとも」な本を読んでほしいこと、読みながら考えること、読んだことをみんなと話し合うこと、いたって平凡な思いつきを書いておこう。それにしても、わが家の息子ももう少し本を読むようにならないものかなあ。何か良い知恵があったら、教えてほしいわ、というのが正直な感想である。

■竹内　洋(たけうち・よう)

〈社会学部助教授〉

1 つか　こうへい『小説熱海殺人事件』角川文庫
P・L・バーガー『社会学への招待』思索社
片岡義男『コーヒーもう一杯』角川文庫

2 「現実」(リアリティ)とは多元的でかつ構成されたものである、というのは、現象学的社会学の常識である。たとえば、「大きな辞書」は、マジメ人間には外国語の学習との関連で意味が付与される。しかし、物ぐさ人間には昼寝に都合のいい枕とみえるだろう。また、泥棒は、売ったらいくらになるだろうかという換金性の視点からみるだろう。「大きな辞書」も実はさまざまに意味付与さ

れ、さまざまな顔をもつのである。

「あるときは××、あるときは○○」というのは、片岡千恵蔵が演じた探偵だけではないのである。「世界」(Social World)は、私達の態度に応じて、いくらでも変化しうる万華鏡なのだ。

ところが、受験勉強をやってくると、答えがいつもひとつしかない単極的パースペクティブに押しこめられてしまう。頭は、「デル単」「シケ単」のように硬くなりがちである。そして、ともすると、存在するものは何の不思議さもともなわず、堅固な自明性の世界におおわれてしまう。

そんな頭をほどよくマッサージしてくれるのが、つかこうへいの作品である。そのあとにバーガーの現象学的社会学というクリームをすりこむことだ。

そして、諸君のナウな才知と文体を大切にして、四年間で教科書とは一味も三味もちがった「私の社会学」や「私の経済学」を書きためてみてはどうだろうか。

ついでに、片岡義男『コーヒーもう一杯』(角川文庫)もすすめたい。諸君たちの日々の生活もちょっとした工夫で興趣あるものになりうることが示唆されるだろうから。ただしこの本は、東京的な、あまりにも東京的なライフ・スタイルを語りすぎている。だから、諸君はこの本を換骨奪胎したライフ・スタイルを創案すべきである。「おじやをもう一皿」というように。

■小原　仁(こはら・ひとし)

〈社会学部専任講師〉

1 滝沢克己著『人間の「原点」とは何か——「思想」の問題と大学変革——』(三一書房)

2 貧しさに満ちている。貧しいことを忘れるほどに……。

音楽、それはビューティフルだ。だが、ハード・ロックに興じる人々の身体(からだ)から、なにかしら虚しさが響いてくる。恋、それはビューティフルだ。だが、恋人たちの間には、冷たい風が吹いている。不信? 金の切れ目が縁の切れ目、sexの終りが愛の終りか。女体、それはビューティフルだ。だが、ビニール本を喰い入るように見つめている人の横顔は悲しく、むしろあわれですらある。ファッション、それはビューティフルだ。だが、長く、短く、太く、細く……めまぐるしい変化、根のない花のようだ。

生にとってビューティフルなものが、ことごとく影をまとっている。それは底抜けの明るさを欠いている。それは純な輝きを欠いている。あらゆる生の美的なるもの

に、貧しさが蛭のごとく貼り付いている。

あなた方にとって大学とは何か。あなた方は、究極において、どこに基礎を置き、何をめざしているのか。富か、権力か、名誉ある地位か。ものを私的に所有しようとすること、他者を支配しようとすること、他者に崇められようとすること、ことごとく虚しいではないか。富・権力・身分、ことごとく人々の共同性に、愛に、差別の楔を打ち込む。差別は、する人、される人、共に悲しいことだ。そこでは、生の根底から湧き上がる歓喜は失われる。愛のオーガズムは失われる。そこでは、生は共有されない。分かち合われない。生はことごとく貧しくなってしまう。にもかかわらず、なぜに人は人よりも高く高くと渇望し、虚飾をはるのか。

人は人であり人である。人が人であることを見失った人間、彼は自己の存在の核に虚無を穿つ。そこから泉のように不安が湧きいづる。人は不安の防衛におおわらわだ。恥も外聞もない。結果、すべてのものを貧しくしてしまう。すべてのものは、自己の虚しい空洞の穴埋めに使われる（あなたは、恋人を本当に愛していると言えるかな？）。

現代、それは、人が人であるという根源的事実を疎外してしまった時代だ。だからといって、そこに居直れ、と言っているわけではない。人はたしかに〈つくられるもの〉だ。だが同時に〈自らつくるもの〉だ。あらゆる人は、自己の生にそれぞれ逃れようもなく責任を負っている。責任を転嫁すること、それは自己に対する欺瞞であり、それは更に自己を貶める。

大学時代、恵まれたモラトリアム、それをあなた方の生の革命の時としてはどうか（言っておくが、革命的であるということは青年の権利などではないんだよ！　それは青年の義務なんだ！　忘れないでほしい）。過去を清算するがいい。人間の原点に眼をすえて、己の生を解き放つがいい。人が人として生きるということはどうい

うことなのか、ラディカルに問うがいい。そこから、己の生に覚醒するがいい。生は常にフレッシュだ。生は常にオリジナルだ。生は常にユニークだ。生は常にエネルギッシュだ。生は常に創造的だ。生は常に革命的だ。人としての真実の生をわがものとしてほしい。それはかぎりなくビューティフルなことだから。

尚、本書から何を読みとろうとあなた方の自由だ。書物というものは、読者の用意に比例して自己を開示するものだ。あなたが貧しければまた読書も貧しいものになる。すべてあなたしだいだ。読書も、他者との関係同様、あなたの実存をかけてかかわるがいい。そうすれば、時として、新鮮な出会いと新たなるスペースが開けることがある。御健闘を祈る！

■吉田　永宏（よしだ・ながひろ）

〈国文科助教授〉

1 伊藤整著『近代日本人の発想の諸形式』（岩波文庫）

2 最近、日本近代文学の上でのすぐれた評論文が文庫版から次々に姿を消して行くという、非常に嘆かわしい現象が出版界に出来している。例えば、田山花袋の回顧録である「東京の三十年」が新潮文庫から消えて行き、平野謙の「芸術と実生活」、中村光夫の「風俗小説論」という、共に代表的な私小説論がいずれも新潮文庫から相次いで消えてしまった。この傾向は読者の一人としても淋しいことであるが、大学で学生諸君と共に日本の近代文学を学んでいる私などにとっては不都合千万なことである。手近に読める文庫版に収録されてあれば、教室で学生諸君に指示する際にも非常に好都合である。

その意味で、かつて新潮文庫版「小説の認識」の消滅と共に消えて行った、同書所収の伊藤整の「近代日本人の発想の諸形式」が今年一月、岩波文庫から再び登場してくれたことを私は素直に喜びたい。『中央公論』が昭和三十九年十月の特大号で「歴史的大特集」と銘打って、「戦後日本を創った代表論文」を特集し、その「代表論文を選ぶ」という「選考座談会」に於て桑原武夫が、「（平野謙の『私小説の二律背反』に比べて）私小説論としては伊藤整君の書いたものの方が筋が通っているんじゃないですか。影響力という点でも、伊藤さんの『近代日本人の発想の諸形式』を推薦したい」と述べているように、これは戦後数多く書かれた私小説論の中でも最も代表的なものの一つであろう。雑誌『思想』の昭和二十八年二・三月号に発表されたこの論文は、それに先行する「小説の方法」（新潮文庫にはいっている）で追求したところの、「大正文学からの通念となっている、いわゆる〈私小

説〉の問題を考えつめた結果の方式化」(瀬沼茂樹)である。伊藤整は、日本の作家が芸術や生活について文学の中で示した考え方は文学だけの問題と限定して考えてはならず、近代の日本人が生活や文化の上でどのような発想をとるかということの徴表であると捉え、これを一般化し、近代日本人の発想法を様々な「型」に分類し、その相互関係を方式化したのである。伊藤整はこれを「調和的発想法の推移」「逃避型と破滅型」「死または無による認識」「上昇型と下降型」「芸術至上主義と立身出世思想」「相対的人間像と並列手法」の六章に分けて論じた。これらの用語は瀬沼茂樹も指摘しているように独特のものであり、そこには特殊の規定があったのだが、それが戦後の日本人の思想形式として広く影響し、今日では広く一般的に用いられるまでになっている。世に「伊藤理論と平野公式」と呼ばれている程、伊藤理論は大きな意味合いを持つものとなっているが、周知のように、「私小説」の問題を避けて通ったのでは日本の近代文学史の本質は何程も明らかにはされないものなのである。しかし狭義の文学の世界の問題としてのみではなく、近代日本人の思考の型の発見・整理としての本論文を、若い読者に是非一読してほしい。

ついでまでに付言すれば、古書店の文庫を並べてある棚から、よいものを探し出して読んでほしいと思う。安価に知的生産が出来るだろう。

■田中欣和（たなか・よしかず）

〈教育学科教授〉

1 灰谷健次郎『兎の眼』『太陽の子』（いずれも理論社）

2 「教育の荒廃」について、あらためてくどくいう必要もあるまいが、しばしば新聞にとりあげられている校内暴力その他の諸事件・諸問題にはみなさんも関心をもっているかと思う。その状況に対処するのに管理強化や警察との協力を唱える危険な傾向も今ある。「教育の荒廃」への対し方の「荒廃」はさらに危機的といわざるをえない。

この大学の新入生であるみなさんのなかには、「校内暴力」などはなげかわしいことだとは思っていても、自分たちとはちがう種類の連中のことだとしている人もいるかも知れない。しかし、あなた方にとっても決して他人ごとではないはずだ。

「受験体制」とよばれる今の教育状況は、そこでの「落ちこぼれ」（＝落ちこぼし）や挫折者を生みだすから悪いというだけではなく、そこでの相対的成功者（つまりあなたたちだ）の人間的可能性をもそこねていると思うのだ。

多くの大学教師、とくに東大などいわゆる「一流大学」の人たちが最近しばしば指摘するところだが、一応ある種の「学力」はあって、こぎれいで、「すなお」で、ひよわで、自主性・創造性に乏しい「受験秀才」たちの問題性がある。

「校内暴力」少年とこの種の「ひよわなエリート」とは双生児なのだと思えてならない。本多勝一氏によれば、今は中年になった高級官僚（もと受験秀才）による家庭内暴力も少くはないという。（『子どもたちの復讐』上・下朝日新聞社）

自らが自らの主として生きる力、力を活かしあい、仲間とともにがんばる力を育くみ難い状況がある。

しかし、このような状況に立ちむかう教育実践や教育運動も現にある。私自身は主として解放教育運動から多くを学んできた。（そこで考えてきたことの一部は、最近『解放教育論再考』拓植書房――としてまとめた。）

灰谷氏の児童文学にあらわれてくる世界は、解放教育運動がめざしてきた質・感覚を、ゆたかなかたちで示してくれていると思う。

へたなリクツを読むより先に、これらの作品を読んでくれた方が、今の教育や社会の問題状況、したがってあなた方の形成条件を再発見するのに役立つのではないかと思う。

両作品とも映画化されたが、その映画だけを見た人たちも、やはり読んでほしい。

あなた方の人間への見方、感じ方が大きくゆさぶられることになるだろう。

■鍛治 邦雄（かじ・くにお）

〈商学部専任講師〉

1 C.S.Lewis『The Lion, the Witch and the Ward-robe』(Puffin Books他)7冊のNarnia物語で最初の作です。

永井荷風著『あめりか物語』『ふらんす物語』（新潮文庫他）

I・カルビーノ著『マルコヴァルドさんの四季』（岩波少年文庫）

沢村貞子著『貝のうた』（暮しの手帖社）

伊藤　整著『近代日本人の発想の諸形式』（岩波文庫）

2 新入生のみなさんのために、何冊か面白そうな本を推薦して下さいという編集委員会のお求めですが、これは案外に難しくかつ回答し甲斐のないことなのです。読書は全く個人の自由の、各人の好みの領域に属することだからです。どんな本を読むか、読んだ本のどこを面白いと思うか、いや本を読むか否かですら完全に本人の裁量にゆだねられています。読書をしないことも含めて、

読書に関して自分の好みをはっきりさせること、自分の好みを見つけ出し、それを育てること、それに全ては尽きてしまいます。

大学一年、二十才前後ともなれば、すでに自分の好みは漠然とでもできあがっているものです。とはいっても受験勉強から抜け出してひまができたが、何を読んだらいいか解らないという晩手の諸君もいるかもしれません。こんな特集が組まれるのも、ひょっとするとこのタイプが少くないからでしょう。自分の好みを見つけ出せずにいる諸君にすすめたいことがあります。梅田の大型書店に出かけて、沢山書架に並んでいる書物を片はしからながめていくことなんです。全部のセクション、全部の分野の書物をじっくり見ていくのです。まず、書名と著者名を見て、興味を唆られるものがあれば、棚から抽き出して目次やまえがきや解説を読んでみる。これを、時間や周囲の目を気にせず、のんびり足がくたびれてしまうまで続けます。うまく自分の気に入るのが見つかれば良し、見つからぬときはそのまま帰ればそれもまた良しです。授業にあきた、雨の降る日など格好のひまつぶしになります。ぜひ試してごらんなさい。

そんな疲れることは「かなわん」というものぐさな人があるかもしれません。この救いようのない(?)諸君のために、いささか過保護かと思いますが何冊か一覧表を掲げることにします。といっても結局は私自身の好みを押しつけることになるのですが。私は物語、小説や詩が好きです。それぞれの作品で、書き手がつかみ出しくりひろげてくれる「虚構」の世界は、その多様さと独自さで私に尽きない楽しみを与えてくれます。どれほど「現実性」を標榜しようといかに「自然主義」に徹しようと、作者の創り出すのは「虚偽の世界」であり、こしらえごと、つくりばなしにすぎません。それは作者個人の心象世界の外在化であり、彼(女)の価値意識により統一された世界です。この「虚偽の世界」に埋没するも良し、逆にその「虚偽性」を冷く見すかすのも楽しいものです。この「虚偽性」と作者の自我の確立、さらに認識力や洞察力の関連は？　となるとさらに面白いのですが……。

John Heartfield
5 Finger hat die Hand
Mit 5 packst Du den Feind!
Wählt Liste
Kommunistische Partei!

―書　評―

山村嘉己著『文学入門――真の文学とは何か――』

（駿河台出版社　一、八〇〇円）

文学の森に分け入るまえに

工藤精一

新しい大学生諸君、おめでとう。これで諸君はついに、諸君の身体と心をがんじがらめに縛りつけていた受験勉強という鎖から、完全に解放されたわけだ。ドストエフスキーはシベリアの「死の家」で四年の刑期を終え、四年間両足を束縛していた重い鉄の足枷からようやく解き放されたとき、「そうだ、さようなら！自由、新しい生活、死よりの復活……なんという素晴しい時間であろう！」と心から感動の叫びをあげているが、諸君もおそらくこれに似た感慨を味わったことであろう。諸君の心は、完全に解き放されて、めまいにも似たものを感じていることでしょうか。それは当然です。しかしやがて自由というものがいかに重いものであるかを、思い知らされる日が来ます。この重い自由を担って生きてゆくためには、自分の心にはっきりした方向をあたえ、そして鍛えあげてゆかなければなりません。大学生活はその時期、諸君のこれからの人生を決定するもっとも重要な人間形成の時期なのです。

諸君のこれまでの勉強は、すべてがではないまでも、かなりの諸君は、大学受験という目標をめざしての機械的な暗記であったはずです。これもやむをえないプロセスなのですが。しかしいったん解き放された頭脳は、しだいにこの作業を拒否するようになります。加えて、し

だいに硬化する脳の膜は、機械的な暗記を通さなくなります。ここで脳に刻みこむには、考えて理解する、つまり納得するというプロセスが必要となります。こうして刻みこまれた記憶は、すんなりと入ったものとちがって、容易に脱け落ちません。そして整理され、考えることを助け、しだいに蓄積されて、ほんものの知識になってゆくわけです。受験勉強という暗い小さなトンネルを出て、社会という広い大きなトンネルに入る中間の大学生活の四年間こそ、諸君の人間形成の時期で、その基礎となるのは考えるという作業でなければなりません。しかし考えるという作業の裏には、常に心がなければなりません。心とは、言いかえれば愛であります。理性のみを過信して、心を無視すれば、大なり小なり『罪と罰』のラスコーリニコフのような過ちを犯す結果になるのです。

さて、この理性と心、知と情を豊かに育てて深味のある人間にしてくれるのが、読書です。古今の名作といわれる文学作品に親しく接することです。親しく接するとは、単に解釈とか大意をつかむとかいうことを超えて、よく読んで、考え、作品によっては軽い暗示が書かれない部分にまで思考の目を向けて（行間を読むというやつです）、共鳴したり、批判したり、教えられたりしながら、想像の中で作品の世界を体験することです。よく一冊の本との出会いということが、人生の途上の大きなできごととして語られますが、これは決していきなり鉢合わせみたいに出会うというのではなく、数限りなくくりかえされる出会いの一つあるいは複数が、そういうことになるのであって、偶然というよりは、意識のとどかぬ心の奥底の願望の成熟による実現という意味で、むしろ必然の要素が多いといえるのです。ともあれ、諸君の自由な選択に委ねられたこの貴重な四年間に、人類の精神的遺産である文学の森に分け入って、そこに未知の現象の世界の精神の世界を見出し、大きな喜びや深い感動を味わうことです。しかし闇雲に突入しても、精力と時間の無駄な浪費を招くだけです。森に分け入るまえに、まず森の全貌を見わたすことが賢明です。それを助けてくれるのが、本書の大きな使命の一つです。著者は豊富な資料に基づき、広く目を配り、世界の文学の流れを、簡明に自分の言葉で総括しています。私たちのように、森の中の特定の一部にはまりこんで、こつこつ研究している者にとっても、ときどき息を休め、濁りをはらって水を清め、自分の位置を確認する意味においても、貴重な本であります。

今諸君にとって大切なことは、考える習慣をつけることだと言いました。考えることは問いかけることです。

これまで何気なく見過してきた現象や事物を、これはなにか？　どうして？　どこから？　どこへ？　などと疑問をもつことです。考える習慣は外国語の勉強からもつけられます。ただ漫然と辞書をひき、機械的に単語をひろうのではなく、語源の意味、接頭辞や接尾辞の意味を考えて、その概念をとらえ、それを日本語に移すとこういう言葉になるわけか、なるほどと納得するわけです。こういう作業をくりかえしますと、興味が出てきて、外国語の勉強も楽しくなるはずです。大学生の外国語の勉強はここから出発しなければなりません。

諸君はおそらくこれまで、もうわかりきった概念として「文学」という言葉を何気なく口にしたり耳にしたりしてきたことでしょうが、ここでまず「文学とはなにか」という問題に否応なくつきあたらざるを得ません。本書の第一章は、当然のことながら、この重要な基本的な問題の考察にさかれています。著者は、「文学とはなにか」を考えることは、人間の生き方を考えることであり、人間の生き方を考えるとは、いかに生きるべきかを考えることではなく、「人間とはいったいなにかなのか」を考えることである、と考察し、阿部知二の「強いて文学の性質を一言で示すとすれば、それは〝人間〟のごときものだとでも私は言おう」という言葉と、英国の詩人ポープの「人間の正になすべき学問は、人間についてである」という言葉を引用しています。そして「もちろん、現代のわれわれにとって、文学のみが人間を対象とする唯一の科学などということは不可能である。科学も、哲学も、歴史も、社会学も、経済学も、それらはみんなつまるところ人間を探究するものであることは疑いをいれず、宗教にいたっては人生の問題がそのすべてだとすらいうことができよう。しかしながら、そのあらゆる部門と比較して、文学がなおかつもっとも人間的であるといえるのは、そのすべての人生を結合的に、つまり、生活をその渾然一体の姿において反映しようとしている点にある。いろいろな科学は、人間の、あるいは人生のいろいろな側面をそれぞれの分野において精緻に分析し、解剖している。しかし、この生活の諸側面をそのなかに統一し、交錯させている焦点としての人間を、しかも生々と描きあげるのはやはり文学をおいてほかにないのではなかろうか」と問いかけています、というよりは断じています。そしてその一つの例証として、スタンダールの『赤と黒』をあげています。一九世紀はじめのフランスの姿を思い描こうとするとき、歴史家や経済学者のそれぞれの立場や観点からの研究よりも、スタンダールの『赤と黒』を読み、彼の創造したジュリアン・ソレルの行動に触れた方が、

より豊かに、より広く、当時のフランスの同情や民情を知ることになりはしないかというのです。

さらに著者は、文学は人間探究の学として、本質として明確な実際的な目的をもたないから、虚学であると規定し、その実学に対する関係を次のように説明しています。「文学はつねに、すべての物に対して、負の姿勢を保つものであることを忘れてはならない。負は決して無を意味しない。それは数学でいうマイナスのことで、プラスと対立して厳然と存在するものである。したがって、無意味な否定が拒絶ではない。それはちょうど実数に対する虚数のように明らかに存在して、われわれの考え方に別の視線をあたえるものである。実の世界では存在しがたいもの、あるいはそこで消えてゆくしかないものに存在の重みをあたえ、実の世界に対してはその意味を一皮一皮はぐように奪いとるのである。このような意味で私は文学は虚学だと名づけたい。他の学問はつねに実際的な明確な目的、対象を有するがゆえに、まぎれもなく実学である。文学はその実学に対比される虚学として、その諸々の実学の存在そのものの根源に問いかけを発すべきなのである。」文学の本質に対する鋭い指摘であり、おもしろい見方であると思います。

若き日のドストエフスキーは兄への手紙の中で、人間の研究、人間の神秘をさぐることを、生涯の仕事とすると言明しています。いかに科学が発達した現代にあっても、「この人間という微妙な創造物に関しては、その精神面はいうにおよばず、身体面においてすらなお不可解な問題を多く残し」ていることは、周知のとおりです。「正しく人間という生きものは、無限の輝かしい神にも似た力を発揮するかと思えば、悪逆無残な悪鬼にも似た所業もあえてなしうる不思議な存在」なのです。ドストエフスキーは人間の心の奥底を神と悪魔の闘いの場と見ていました。この人間を考察し、その神秘をさぐる手段は、芸術以外にはないのです。著者は、「真の文学」とことわっていますが、だからトルストイは思想と現実の矛盾に引裂かれると、その苦悩の解決を求めて芸術にもどっていったのです。

これが芸術なのです。真の文学なのです。だからこそ諸君に、あたえられたこの貴重な四年間に、古今の名作と評価されている真の文学作品に親しく接し、自分を、そして周囲を見つめ直すことをすすめるのです。

本書はこのような基本的認識に立って、文学についての諸々の問いかけに答えてくれます。まず「文学の成立と展開」の章では、J・E・ハリソンの説に基づいて、文学が古代の祭式にその始源をもつことを説明し、成立

の動機を、宗教、快楽、労働の三つの面から考察しています。そしてこの三つの動機が独立的にはたらいて互いに矛盾しあうというものではなく、むしろ人間の生活自体の中で分かちがたく融合しているものであり、広く生きた人間を把握しようとしたものであって、文学はその発生からすでにこのような本質をもっていたことを指摘している。次のジャンル論では、詩――抒情詩と叙事詩、散文――小説（短篇・長篇）、随筆、伝記、日記、さらにそのいずれにも属する劇などについて、それぞれがどのようなもので、どんな発生をもち、どのように変遷したかを、広く世界の文学、日本の文学にも目を配りながら、形式論、歴史的な消長、社会的な機能などの面から考察し、われわれの文学に関する知識を深めてくれます。

文学部以外の学生諸君にとっても、おそらくもっとも興味深いのは、第二部の「文学の流れ　文芸思潮」であろう。時間と空間を超越した抽象的人間などというものは存在し得ない。人間は必ずある民族に属し、ある時代に、ある環境の中に生きているものです。したがって人間の研究である文学が、それらの条件と深いかかわりをもつことは当然であります。著者は、文芸思潮、つまり文芸の歴史的発展の背景をなす思想の流れを研究するということは、ある時代、ある民族の大きな文化の流れを概括的に把握しながら、同時に、そのなかに創造的な特異な天才を発見する仕事を意味する」として、とくに近代ヨーロッパの流れを例にとり、そこにあらわれた大きな思潮について考察を加えています。ルネッサンスにはじまって、古典主義、浪漫主義、写実主義、自然主義、象徴主義と変遷してゆく大きな思想の流れが、中世の暗黒からの人間解放、君主国家の成立、貴族政治、産業革命、ブルジョアジーの台頭、民主的革命運動の発展など近代史との関連において、明快に叙述され、それぞれの時代精神を代表する大作家たちの活動が興味深く語られています。ある意味では、むしろ壮大な読みものとさえ言えます。

文学の森に分け入る前に、と言ったが、文学を専攻する学生諸君には、文学の森に分け入りながら、と言いかえるべきであろう。常に座右において親しむべき本であり、また十分にその価値のある本であることを強調したい。

（くどう　せいいち・文学部教授）

第一回・二回組織部・書評編集委員会共催による、講演会開催についてのお知らせ

●第一回講演会

テーマ「私達の受けてきた教育とは――そして大学とは」

時……四月二十八日（火）午後一時より

所……関西大学法文学舎

講師…宇井純（東大工学部助手）

主著『公害の政治学』（三一省堂新書）

『欧州の公害を追って』（亜紀書房）

『公害原論』『公害原論　補巻』（亜紀書房）

共著『大学解体論1・2・3巻』（亜紀書房）

現在は、東大自主講座「大学論通信」の代表責任者をやられるかたわら、反「公害」の活動に従事しておられる。

私達の視点と基調

…昨今、教育状況をめぐる新たな動きが表面化してきている。それは一つには中学、高校における校内「暴力」という、まさに「暴力」キャンペーンによる露骨なまでの警察権力の導入、また生徒の暴力に対しては教師の体罰＝暴力によって制圧すべしといった思想の復活に現われているように、国家は中学、高校の生徒の管理強化に乗り出してきている。国家の生徒管理の後に来るものは何か？　それは最近復活の様相を見せている、「日の丸」「君が代」教育を眺めれば明らかである。あえてここではいうまい。このような教育状況に対する一つの発言に、この講演会がなれば幸いである。

●第二回講演会

テーマ「文学入門」

時……五月六日（水）午後一時より

所……関西大学法文学舎

講師…工藤精一（関西大学文学部教授）

私達の視点と基調

…この講演会は主に新入生に対する文学入門のためのものである。勿論新入生以外の人達ももう一度、どういう姿勢で文学に接するべきか、何故文学書を読むのかといったことを考え直すためにも、ぜひ聴講してもらいたいものである。

——講演記録——

裁かれる大学

五十嵐　良　雄

以下に掲げるのは、昨秋(10月25日)、書評編集委員会が主催した講演会の講演記録である。

この講演会のテーマは、「裁かれる大学」。このテーマは、講師五十嵐良雄氏（相模女子大教授・現代教育研究所所長）の最近著の同名書物「裁かれる大学」(現代書館刊・一〇〇〇円）に因んだもので、最近の大学状況に対する一つの発言として取り組んだものである。

昨今の大学状況について言えば、一つには、新構想大学、筑波大学における様々な矛盾の露呈があげられるだろう。この大学については、昨年「書評」誌で数度取り上げたのでここでは深く考察しないが、今や筑波大学では、昨年10月1日の「開学七周年記念行事」の際に見られたように、「記念行事」一つやるために四百人以上の警官が必要なのである。

あるいはまた、知の国家管理とも言える共通一次試験の実施、放送大学構想の登場などがあげられるだろう。

このような動向は、七〇年代以降八〇年代に向けての公教育総体の構造的変動ととらえるべきである。しかも八〇年を迎えてそれは、生涯教育論の具体化による全国民的な教育・学習意欲の組織化によってさらに推し進められることだろう。そして、教育が、「教育とは一体何だ」と問われることなく、現在は勿論、過去においても、政治的・社会的・経済的に利用される位置しか持っていないのである。

このような教育、あるいは大学に対して、我々はどのように異議を唱えたら良いのだろうか？　勿論、〝教育〟は〝教育〟としてだけ存在しているのではない。それはあらゆる社会的現象と関係を持ちながら存在している。だから、教育の変革を展望する場合、それを支える社会の変革も我々の視野に入れておくべきであろう。

この「裁かれる大学」の講演会においては、「大学において学生は何をすべきか？」という内容が提起された。

自分達が学生であることをもう一度問い直すべきなのである。そこから、また新たな道が見えてくるだろうから。

（以下は、講演会の録音テープを書評編集委員会が原稿に直し、それを五十嵐氏に加筆、修正をしてもらったものである。文章の一部省略については、五十嵐氏の判断でなされたものである。）

○状況を拓り開くのは常に少数

只今、御紹介されました五十嵐です。出席者の皆さんの顔を眺めているうちに、先ず初めに、本論にはいる前に、少しばかり話しておきたいことが、頭に浮かんで来ました。

それは、常に、いつの時代でも目覚めた人間は極めて少数の人たちだということです。私がここで言う目覚めた人たちというのは、その時代の動向や状況に流されていないという人たちのこと。或いはまた、時代や状況が提起する問題に真剣に取り組んでいるという人たちのことです。圧倒的・大多数の人たちは卒直に言って、時代や状況のまにまに流されている人たちです。戦争の時代は、その時代の動向に流され、つまり戦争を讃美し、平和の時代は、その時代でまた、その時代の状況に流されて生きているのが、圧倒的多数の人たちの姿であるということ。庶民大衆というものは、どうもそういう人たちのようです。

本日のこの講演会もマジメな問題をマジメに考えようとする会合ですから、この関大の学生のうち、ごくごく少数の人たちしか集まらないだろうと思います。もしも私がテレジや新聞に出ている有名人であったとするならば、話の内容のいかんにかかわらず、沢山の学生たちが集まってくるだろうと思います。或いはまた、おもしろいお遊びでもあるならば、やはり沢山の学生が集まってくるだろうと思います。時代や状況の提起する問題に真剣に取り組むという若者は、いつの時代でも、どこでも極わめて少数に決まっております。

ところが、人間社会の歴史というものは、基本的にこのごく少数の目覚めた人間たちによって、拓り開かれたり、担われたりしてきたのです。

そのことは人間社会の歴史を見れば明らかなことです。目覚めたごく少数の人たちによって拓り開かれた道を実は大衆は、後から追認していくだけなのです。

石川啄木が生きている時、人々は寄ってたかって、渋民村から彼を追い出していながら何十年かのちになると、彼の短歌をもてはやし、戦後では、学校の教科書にも載るようになっています。かつてアナーキスト、無政府主義者という名辞のもとに弾圧されていた人たちが例えば、戦後、逆に評価され、教科書にも載るというように。

現在、一九六八年、六九年をピークとして全国的規模に展開された大学闘争の時代には想像も出来ないような閉塞してしまった状況に大学全体がおおわれております。自治会活動も学生の文化活動も、思想イデオロギー活動も、学生の学問研究活動も大学から、全く火が消えたようになっています。大学権力の管理、抑圧、或いは弾圧によって、現在の学生たちは、全く無気力、無関心、無感動、無責任といった様相を呈しております。

もちろん、これは関大だけではなく、現在の大学の全国的な状況であります。従って、そういう大学状況というか大学の現状においては、まともに大学の問題

を考えるという人間は、ごくごく少数の人たちであるということです。しかし、繰り返しますが、その少数の人たちによってのみ、大学変革の突破口が拓り開かれ、その拓り開かれた突破口をあとから一般の学生大衆が追認していくというのが、リアルな現実の姿だということです。

○少数者でも人間的感性で対決を

もう少し、本論にはいる前に、人間社会の歴史は、ごく少数の目覚めた人たちによって拓り開かれ、或いは担われたりして進められてきたという問題について触れておきたいと思います。

例えば、ジャン・ジャック・ルソーとその著書『エミール』に即して、この問題について説明しておけば。

御承知のように、今から二百二十年ほど前に公けにされた『エミール』という本は、発売されると同時に、出版が禁止されて没収され、同時にその著者ルソーにも逮捕状が出されたりしました。そのためルソーは、確かおよそ八年間近くの間、スイスに亡命を余儀なくされました。

なぜ、『エミール』は没収されたのか。

またなぜ、ルソーに逮捕状が出されたりしたのか。

こんにち、既にその理由や根拠が明らかにされているように、ルソーの主張や考え方が、当時の社会の秩序や制度にとっては、余りにも過激だったからです。

つまり、当時のヨーロッパの上層階級いわゆる当時のヨーロッパの支配階級の生活のなかでは、子どもを産む人間と、育てる人間と、躾ける人間と、教育する人間とは、別々でなければならないと考えられ、乳母や家庭教師や師伝などが、それぞれ独自に存在していたわけです。そういう当時の支配層の家庭秩序や家族制度の在り方に対して、ルソーは、『エミール』のなかで、繰り返し主張していたことは、

「母親は自分が産んだ子供を自分の乳房をもって、自分自身の身体で育てていけば、家族はもっともっと明るいものになるであろう。」

つまり、自分が産んだ子どもは、誰かに任せて育てたりせずに、自分で育てなさいということです。今から考えれば、全く当り前のことを全く当り前に言っているわけです。

ところが、そういう考え方や主張は、

当時のヨーロッパの支配層の家族の秩序の在り方からすれば、その家庭の秩序に反逆するものであり、こんにちで言う過激思想が、ルソーの主張や考え方のなかに在ったということです。

そのため、支配層はそういうルソーの考え方が普及していくと、自分たちの拠って立つ秩序や制度の在り方が破壊されていくというわけで、直ちに『エミール』を発売と同時に没収し、その著者を逮捕しようとしたわけです。

端的に言えば、時代の秩序や制度というものは、その時代の権力であり、また同時に、その秩序や制度を支えているものは、その時代の大衆の意識でもあるわけです。

全く閉塞してしまっている現在の大学の現実というか、現在の大学の秩序でもある学生の管理・抑圧を基本としているこんにちの大学体制は、やはり端的に言って、こんにちの学生大衆によって担われ、ささえられているわけです。学生の人間性を前提にして成立しているこんにちの大学体制に対して、少しでも異議申し立てをしようとすると、直ちにその異議申し立ては大衆意識に依拠した行動によって抑圧・弾圧されてしまう。

私は、かつてこの点に関連して、私の主宰している反教育シリーズの『肉声史――卒論とは何か――』（現代書館刊・三五〇円）において、詳しく書いたことがあります。

「人類は、より人間的なものを求めて、この人間社会を形成し、その社会を維持・発展させるために、さまざまな秩序や制度や仕組みをつくってきた。しかし、人間社会の歴史とはつくり出され、形成されていったその社会の秩序とか制度とかいうものを、より人間的な発想をもって、その秩序や制度によって疎外されてきた人間の内面を実現させていくという、いわば時代秩序や制度に対する人間的な反逆の闘いの歴史を基礎にして、担われ、発展させられてきた」と。

的確な説明ではありませんが、大学闘争以前の日常に復帰してしまったかのような学生を管理し、抑圧することを基本とした現在の大学体制や大学状況に対して、人間的感性をもって対決していこうと考えている人間は、ごくごく少数の人たちであるということ。しかし、その少数の人たちの主張や考え方を基礎にしていかなければなにごとも始まらないし、圧倒的多数の一般の学生大衆の主張や考え方は、抑圧する体制や制度の側にあるということです。むずかしい問題ですが、一般の学生大衆は、権力であると同時に、しかし、その一般学生大衆自身が動かなければ、事態は少しも変わらないというわけです。

○具体的に生活現実から出発せよ

ここに参加しておられる皆さんは、先ず以上のことを踏まえた上で、耳を傾けていって欲しいと思います。

御存知の方もあるかと思いますが、私はこれまで随分と大学について考えたことや、大学改革や大学解体や或いはまた

大学で行われている学問研究の本質や実態などについて自己主張を展開して来ました。例えば、『パトスから大学へ』や『教育そのものへの問い』や『裁かれる大学』や『学生・単位・教師』などの本を著わして来ました。大学の変革や解体のための実践的指針としてか、反教育シリーズの『学生・単位・教師』（現代書館刊・三五〇円）は知られざるベストセラーとして全国各地の大学の学生たちの眼に触れていったようです。

それらの本のなかで、私が一貫して主張していることは、

〝真実を私たちが知ろうとするならば、既に形成された概念の世界から認識を出発させてはならない。いつも常に、今、現に自分が生きている具体的、現実的な、自分自身の具体的な生活現実から認識を出発させなければならない〟ということです。

例えば、私たちが大学の問題を考える場合でもそうですが、わかりやすく言えば、大学について書かれたあれやこれやの本のなかに私たちの大学があるのではなく、まさに私たちにとって大学とは、今、現に学生としてこの関大に在学しているならば、日々の自分の関大における大学体験のなかにこそ、まさに自分にとっての大学が存在するのだということです。

もちろん、教育についてもそうですが、教育について書かれたあれやこれやの教育関係書のなかに教育があるのではなく、まさに、教育の名のもとに受けてきた自分のそれまでの教育体験そのもののなかに、自分にとっての教育が存在するのだということ。

文明社会においては、海なら海の問題を認識するために、海に関する本を読んで、海についての知識を私たちは身につけていくわけ。実際に、海に一度も行ったこともない人間でも、海に関する知識、海は陸地の何倍であるとか、海水はしょっぱいとか、塩分が何パーセント含まれているかということをよく知っているわけ。いいですか、海を一度も見たこともない、海に一度も行ったこともない、海で一度も泳いだこともない、そういう人間でも海に関する本（海に関する概念）を通じて知っているわけです。しかし、本来的に言えば、海に関する知識（海に関する認識）は、実際の海に関する体験を通じて、泳いで溺ぼれそうになって海水をたらふく飲んで、初めて海水はしょっぱいというように、少しずつ海に関する認識を深め、海に関する知識を獲得していくわけです。大学についても全く同様です。大学に入学する以前に持っていた、或いはつくられていた大学に関する知識やイメージは、実際の大学生活を通じて大学における個々的、具体的な大学体験を通じながら改められていくわけです。

法律に基づけば、大学というところは学問するところであり、親たちは大学というところは勉強しに行くところだと思っている。秩序や制度に基づいた幻想によれば的確にそうだし、既に形成された概念に基づけば確かに大学というところは、勉強するところかも知れないが……

……ほんとうは、そうではなく、単位をと

るところである。授業に、何故、出席するかといえば、出席をとられるから出るのである。なぜ英語を勉強するかといえば、第一外国語の必修だからです。

つまり教える人間も教わる人間も、それを学習しなければならない根拠を持っていないわけ。この日本の学歴社会で生きていくための、資格をとるために来ているわけなんです。

自分たちの問題意識や興味や関心と全く関係なく、一方的に深められた大学のカリキュラムに基づいて、ただただ卒業資格をとるため。そうです。自分たちの問題意識や関心や興味と関係なく決められているカリキュラムですから、学生の側に学習意欲が喚起される筈がないんですよ。……（後略）

○語学問題における植民地主義

いいですか。今、自分が存在している自分自身の現実の生活過程から認識を出発しなければ、真実は知ることは出来ないということは、例えば、英語の勉強や語学の勉強に典型的な形で現れています。

イギリス大使館に務めるとか、英国や米国で暮すそういう人間以外にとって、英語などは生活において全く縁もゆかりもないわけ。日本の国で生れ育ち、日本の国で暮していく人間にとっては、英語も仏語も独語も全然関係ないわけ。その英語をしかも、法律では一つの外国語といっているのに、中国語や朝鮮語やスペイン語をすっとばして、日本人にとって外国語とはただ英語だけであるかのように、中学から外国語というと英語を前提にして、勉強させられるわけです。なぜ、外国語のなかで英語を勉強しなければならないかという根拠は教える人間も教わる生徒も考えたことがないんですよ。ただ山があるから山に登るというように、英語があるから英語をやっているわけです。

もう少しこの語学の問題に関連して思い出すまま話を進めていくなら、私が不思議でしょうがないのは、日本の国中が One-Language 日本語でしょう。そういう国で暮している人間が何十年やって英語も仏語も独語もできるようにならないっていうのわかりますか。なぜなら必要がないからです。現実に何で大学で仏語や独語を習うの?。将来独語と関係ない職業につくとしたら独語と一切死

ぬ迄関係ないことになりますね。そういうことを何でやるんでしょうか。

私はインドで長い間暮していたから、植民地と本国の例をいつも頭に思い浮かべるんですが、インドの現実を眺める場合も抑圧され、支配されている側から見るのか、それとも抑圧し、支配している側から見るのかで全然違ってくるんです。インド人が英語を話せる事実、これは支配してきているイギリス人がインド人に英語を強制したからでしょう。そしてその強制しているイギリス人はパミール語やヒンズー語やベンガル語を勉強するかというとしないわけです。そのことをイギリス人はおかしいと思わないわけです。それと同じように日本にも朝鮮人がいるでしょう。その朝鮮人に日本人は日本語をしゃべらせてきたわけです。そもそも第一外国語は朝鮮語でないとおかしいわけですよ。ヨーロッパの言語をやるっていうのは植民地主義のあらわれなんです。言語における大国主義ってわかりますか。日本人が朝鮮人に日本語を強制し、日本人が、より大国であったイギリスの言葉を喜々として使う。これはおかしいってことわかりますか。文明社会に生きている人間というのはそういうことがわからないわけです。イギリスに生きている人間はインド人に英語を使わせることを西欧文化の拡大のように思っているわけです。シュヴァイツァーっていう男がアフリカにいたけど、アフリカの人から総スカンを食っているわけですね。誰も彼を尊敬していないんです。なぜなら、シュヴァイツァーは主観的に自分はアフリカのために文明をもたらしていると考えていたんですが、実は、それはアフリカの人にとって迷惑なことだったからです。

それはベトナム戦争の問題を考える場合にもよくわかりますね。アメリカがベトナムを侵略した、これは事実です。この侵略の口実はベトナムを共産主義から守るというものだったところから考えてみれば、ベトナムが共産主義国になろうがなろうまいが、それはベトナム人が決めるものでしょう。民族自決の原理ですよね。

ここで私が言いたかったのは、言語における大国主義というか、差別主義というか、他民族を抑圧し支配する立場に立っている語学教育の問題が、教える人間も教えられる人間も全くわかっていないということです。……（後略）

○関係性の中で自己を鍛えよ

今、大学の学生であるということは、言うまでもなく、大学とかかわって自分の青春がそこに存在するということであるわけです。つまり学生存在として在るなかで、学生存在とは言うまでもなく、大学とかかわって自分が存在するということであり、それは同時に繰り返すようですが、大学とかかわって自分の青春がそこに存在するということであります。

先ず、このことをしっかりと踏まえて欲しいんですね。

ところで、青春とは御存知のように、まさにその人間の生涯のうち、最も精神

的にも、肉体的にも飛躍的に成長する時期であります。いわば、その人間の人生のうち、物の見方や物の考え方の基礎が最も意識的に形成される時期で、その人間の生涯の原点をなすのがこの青春の時期であります。もちろんどういう時期が青春であるかということは、それぞれの人間の個別的、具体的な成長の過程によって違うかもしれませんが、とにかく、大学が二十歳前後の人間が通過していく場であるとするならば、やはり一般的に言って、大学生は大学とかかわって青春が存在するといっても間違いではないと思います。

五木寛之君は、人間は生涯のうち必ず、誰でも青春という門を通過するものである。その門をどのような姿勢や態度をもって通過するのかという、その通過の仕方のなかに、その人間の生涯の過し方の原型があるのだということで、彼は今、ライフ・ワークとして『青春の門』という作品を書き続けています。

つまり、適当に要領よく、どこも傷つかずに青春の門を通過していくのか。或いはまた、真剣に真面目に沢山の傷を受けつつ青春の門を通過していくのか。その通過の仕方のなかに、実はその人間のやがて生きていく未来の姿が現れているのだという意味から、かつての自分をモデルにして伊吹信介という作品主人公にして『青春の門』を書いているわけです。

五木寛之は、その作品において、青春期に在る人間が最初にぶつかる最大の問題はセックスの問題であるとしているが、私も、青春における最も中心的な問題は、やはり性の問題であると思います。性の問題とは、男にとっては女の問題であり、女にとっては男の問題であり、それ

組織部員募集

（ガイダンス実施中）

生協新聞・書評誌の編集発行、講演会の開催など、生協の文化・教育活動を自らの手で造り上げてみませんか！

生協本部棟３Ｆ

組織部（内線　４８２１）

は社会科学的用語を使って言えば、性を媒介とした男と女の関係の問題のことです。肉体と精神とは、実に密接な関係にあるわけで、青春期特有の問題でもあり、青春期の中心的問題でもある性の問題も人間の成長発展にとって、どのように認識していくものであるかは、決して学校教育のなかでは教えてくれないものです。青春のこの問題にかかわって、もう少し自己形成の問題について、話をしていくなら。

既に述べたように、私たちが小・中・高の学校教育を通じて身につけてきたものは、概念を概念として考察したりするだけで、その概念を成立せしめている実態についておもいを及ぼすということはできない思考の方法か。或いは、自分自身の生きているその時の生活現実から認識を出発させず、常に既に形成された概念から認識を出発させるという思考の方法なんですね。従って、自己形成の問題や自己成長の問題を考える場合でも、それらに関連した本を読んだり、人間成長一般の問題として考えたりしていくわけです。

それに対して、私の問題の捉え方（問題の考え方）は、いつもいつも自分自身の具体的な現実過程を認識の出発点にして、問題を考えていくと言っているわけです。例えば今、私は女子大で教育原理の講義をしているわけで、講義を始める前にいつも大きな声で言っていることは、

〃人間社会というものは、基本的に、根元的に男と女の関係のなかで、男と女のかかわりを基礎にして、初めて成立しているわけです。男だけであっても、女だけであっても、人間社会は存続しないわけです。そして、男と女の関係のなかで傷つけたり、傷つけられたり、愛したり、愛されたり、裏切ったり、裏切られたり、おもったり、おもわれたりするという関係のなかで、さまざまな芸術や思想やイデオロギーが生み出されてくるわけです。同時にまた、この男と女の関係は人間関係の原基でもあるわけ。つまり性を媒介とした男女の関係こそ、人間関係の最も基本的な関係の姿でもあるんです。〃

そうです。

人間っていうものは、特に青春期に在る人間にとっては、男と女の関係のなかで悩んだり苦しんだりしながら、人間がひとまわりもふたまわりも大きくなっていくものです。好きな人のために、ほんとうに人間って、一生懸命になってなんでもするんです。人間っていうものは、まさに関係のなかで自己形成を遂げていくんですね。

女子大というところは、人間社会が男と女の関係のなかではじめて成立しているにもかかわらず、女だけを分離して、女だけの集団と女だけの関係をもって成立しているところなんです。繰り返すようですが、男と女の関係のなかで、苦しんだり悩んだりしながら、はじめて人間が成長していくのに、女だけ、或いは男だけ分離された集団の関係のなかで一体、人間は成長していくのでしょうか。

この当り前のこと。人間っていうもの

は、まさに関係のなかで自己形成を遂げていくということ。人間の本質とは、まさに関係の総和であると言われているように、どういう人間関係のなかに自分の身を置いて、毎日を生きていくか。そのことによって人間がつくられていくんです。まわりの人たちが例えば、皆一生懸命に勉強しているという、そういう人間関係のなかで生きている人間にとっては、勉強するということが全く普通のこととされるが、まわりが皆、勉強していないという関係のなかでは、ちょっと勉強しても、すごく勉強したような錯覚に落ち入りますね。

だから女だけの分離された女子大という女だけの関係のなかで生きていくということは、自分の自己形成にとって重大な問題をもたらしてくるのです。

こういうように、自己形成の問題をわが身の問題として考えることをいつも私は主張しているわけです。……(略)

○人間根源主義を思想として

大学について考えるならば、みんな大学に幻想を持って入ってくるんですね。持ってないといったら嘘ですよ。それが一年か二年でくずれ去っていくんです。まともな人間は半年位でくずれますね。新入生が大学に入って来る時に持っていたイメージと全然違いますからね。そういう時に、だからマージャンなどをして遊ぶのではなく、そもそも大学とは何であるのかという根源に私達の考え方が向かわなければ困るわけです。その根源に我々の考え方が向かうために一番重要なことは、いつも問題を根本から、根源的に(ラディカルに)問うという考え方を持っていかなければいけないのですね。その考え方を持つために一番重要なことは、あの『ヘーゲル法哲学批判序説』というなかでもその言葉を主張していますが、例えばラディカルであるということは、物事を根源から認識し、根源から把握することなんですけれども、では、そもそも人間にとっての根源は何でしょうか。それは、人間そのものであると私は考えます。

人間にとっての根源は人間そのものであるということは、具体的にその現実とかかわって生きている人間から考え方を出発させるということです。もっと具体的に言えば、ある現実にかかわって、抑圧され、虐げられ、支配されている立場に立って問題を考えていくということなんです。

例えば、三里塚の飛行場(成田空港)の問題を考える場合でも、私達が飛行場をつくる側に立って問題を考えるのか、つくられる側、つまり農民の立場に立って飛行場を考えるのかによって、問題の把握の仕方が変わってきますね。飛行場の問題を本質的に理解するということは、その飛行場の問題にかかわってそこに生きている人間、飛行場をつくられることによって抑圧され、虐げられ、被害を受ける人間の側に立って考えなければ、できないことなんですね。

例えば、フランツ・ファノンという人が、「もし大きな川があって、今まで皆がその川を泳いだり、船で渡ったりしていた時、そこに橋をつくることは、そのことによって人々が人間として豊かな意識を持つようになるならば、橋をつくってもいいけれど、逆に非人間的な意識を持つようになるならば、橋はつくらないほうがいい。」ということを言っています。私も賛成です。便利になることによって人間が人間らしい感覚や感性を失っていくのならば、便利にならない方がいいと思います。それはどういうことを意味するかといいますと、人間にとって一番基本的な要素は人間の感性であり、「経済学・哲学草稿」のなかでマルクスが言っているんですが、「人間にとっての最高の労作は人間的な感性」なわけですから、その人間的な感性をダメにしてしまうような便利さは、人間にとって害だからです。

一九六八、六九年をピークとして展開された全共闘の大学闘争は、次第に街頭闘争へ向かいました。街頭へ出ていくという非日常的な闘いを学生達はしていたわけです。日常性というものがまさに人生そのものですから、そういう学生達は、生きている日常性から繰り返し繰り返し人間的な感性を持って、人間的な感じとして許すことのできない現実に立ち向かうことを通して、人間的感性がよみがえってくるし、みがかれてくるし、豊かになるというふうに考えるわけです。そういう考え方を支持した学生達によって、最初横浜国大で自主講座が行われていくんです。……(略)

○魂の本源からの出発を

あなた方が大学の問題を考える場合も、大学という現実にかかわって、いつも抑圧され、虐げられ、支配されている学生自身の立場に立って問題を考えていくこと、これが第一ですね。

そして、第二に私達がおさえておかなければならないのは、いつも自分が生きている具体的な生活過程こそ、私達の問題の考え方の出発点であるということです。それは裏返せば、既に誰かによって形成された概念から出発するのであってはならない、ということでもあります。今の学校教育を通してつくられている私達の物の考え方というのは、つくられた概念からしか出発できないような、そういう認識方法でしかなくなっているんですね。

人間の実践主体というものは、対象に

働きかけることによって、働きかけられた対象が変革されると同時に、変革する過程で、主体そのものも変革をとげるわけです。

例えば、大学祭が年に一回行われます。しかしながら、大学祭が終ると、普段の講義にもどってきます。つまり、日常性に戻るわけですが、日常性こそが人生そのものであると考えるならば、大学祭という、いっときの非日常で不満をはらしてしまうのではなく、講義等のなかで、人間としての感性が許すことのできない大学のあり方そのものを日常不断に弾劾し、告発すべきなのです。そういうふうに現実を変革しようとすることによって、同時に自分も変革され、人間的感性も豊かになっていくんですね。人間的感性が豊かでなければ、人間的な思想も理論も学問も生まれてきません。

私が五十年間生きてきて、得た結論というのは、理性に先だつ人間の魂の本源から出発し、考えていくということです。

……（略）（昨年10月25日、関大にて）

五十嵐良雄のプロフィール

一九三〇年生まれ。学生時代全学連などの活動に従事しつつ、一九四八年以降、一五年間にわたって四つの大学（早大、法大、学芸大、東大）に在学する。一九六三年以降、アジア・アフリカ諸国やソ連、東欧諸国の大学に留学。帰国後、横浜国大非常勤講師となり、彼の将来を大きく左右する全共闘と出合う。彼はこの大学闘争の中でさまざまな全共闘学生たちと出会いながら、彼らの主張する大学解体の考え方とやり合い、時には肉体的暴力を伴うような弾劾や糾弾を彼らから受けたりしつつ実に多くの考えをうけたり、学んだりしながら彼自身の思想を確立していった。

また彼は、教育分野における思想イデオロギー活動の拠点として、反教育シリーズと現代教育研究所（NEI）を創設し、現在も大学とはどうあるべきなのかを追求しつづけている。現在は相模女子大教授。

◎主な著書

「国家教育労働運動史」
「国際教育論序説」
「教育そのものへの問い」
「転びの時代をいかに生きるべきか」
「学生・単位・教師」
「パトスから大学へ」
「裁かれる大学」

―研究余滴―

ボードレール3

ボードレールの散文詩とパロディ

山村嘉己

―いったい　だれが一番好きなのか　いってみよ奇妙な男よ　父君か母上か　姉妹かそれとも兄弟か。
―ぼくにはそんなものいやしない。
―だったら　友達か。
―君がいったその言葉は　今日まで何の意味かも分らぬままさ。
―祖国はどうだ。
―そんなものどこにあるかも知りゃしない。
―美人は。
―もしも女神で不死のものなら、喜んで愛しもしようが。
―では　お金は。
―大嫌い、君が神様を大嫌いなように。
―ああ、それじゃいったい何が好きなのさ　途方もなくふしぎな人よ。
―雲さ…　あそこを流れて行く雲なのさ、すばらしい雲さ！

（『ふしぎな人』）

あまりにも有名な『巴里の憂鬱』の冒頭の詩である。言葉が単純、明快で、しかも詩人の私生活を写し出しているということでよく引用される詩である。たしかに、ここにはかれの実生活をうかがわせる言葉の端々があり、またかれの得意な渋面をのぞかせる意味深げな句々がいくつものぞかれる。しかし、ここでのぞかれるかれの渋

面は必ずしも深刻な暗いそれではない。どこかにひそやかな苦笑をひめたそんな素顔がくみとれそうな気がする。そして、このようなところに、この散文詩集の独得の風味があるのだ。『巴里の憂鬱』はボードレールの詩境にかなりの変化を示したことを如実に示しており、その表われがパリという街へのかれの姿勢のあり方にあることはすでに述べた。パリをどのようにとらえ、どのように表出するか、つまり、現代人としての生活の条件をもっともよく表現した街としてのパリへの対し方に微妙なふれのあることをぼくは前二回で述べてきたつもりである。しかし、ここではその対し方の表出がいかに変化したかをもう少し追求してみたい。つまり、『悪の華』とはちがった表現の仕方がここには仄見えるのである。もちろん、『悪の華』そのものもきわめて意識的な所産であることは今さらいうまでもない。何しろ、「私に十二回詩を講ぜしめれば、だれにでもすぐれた詩を書かせてやる」と豪語したといわれるかれのことだから、詩を作るのはたんなるインスピレーションの溢れ出るままに書きなぐるロマン派のそれとはちがい、非常に意識的な構築作業であったことは想像にかたくない。しかし、『巴里の憂鬱』では、その意識がもっと深味のある、そして苦味のある、しかもペーソスを含んだものとなっている点を見逃せない。「ふしぎな人」はその意味できわめて象徴的な作品である。

この作品をもしたんに自伝的な作品として読むなら、結局は思わせぶりな、厭味なものと考えることはできる。とくに幕切れの「雲さ」というあたりはあまりにも軽すぎるといえないことはない。しかし、たとえばルネ・ギャランがいうように(『ボードレール　詩学と詩情』)、ここに聖書へのパロディを読みとると、この作品の相貌は一変する。マタイ伝によれば、キリストはパリサイ人の前に《異邦人(エトランジェ)》としてあらわれ、かれらの策謀を砕き、戒める説話をしながら次のように語ったという。「あなたがたはわたしが旅人(エトランジェ)であったときに宿を貸さず、裸であ

ったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかった」。もちろん、このことで、かれが自らをキリストに擬したと早合点することは許されない。しかし、ギャランもいうように、かれが自らを地上的価値の棄却者としてとらえ、この世に席をもたぬものとして《異邦人》と考えたとしたら、たとえば《雲》はまさしく《他の生》の、あえていえば《超越的世界》の象徴として驚くべき意味の転換をとげるのである。事実、かれは女性をも、「女神で不死のものであるなら」、つまり、神性と不死性をもつ《超越的なもの》であるかぎり愛しうるといっているではないか。ボードレールがそこまで意識的であったかどうかは証しするすべもない。しかし、冒頭の「誰が一番好きなのさ……」の裏側に、同じマタイ伝10章37の「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない」。あるいはルカ伝15章26の「だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない」、をおいてみるとき、さらに、「祖国はどこにあるかも知らない」の奥に、ヨハネ伝18章36の「わたしの国はこの世のものでない」、を読みとるとき、われわれはどうしてもこの世を超えたところに自分の世界を見出さざるをえなかったボードレールの心内をより明瞭にかぎ出すことができるように思えてならない。もちろん、このことはギャランがいうほど、かれが現世を《逃避》しようとしたことを意味するとはぼくには思えない。むしろ、あくまでも人間の生の《条件》として現生活を生き抜きつつも、そこに《不在》とならざるをえない人間の運命を考えたものとしてかれをとらえたいのである。それであってこそ、とおく現代のカミュの《異邦人》に通い合う現代性を帯びたものとして、ボードレールの人間観を考えることができるというべきであろう。

このパロディとしての作品の深味を示す例は他にも枚

挙にいとまがないが、たとえば同じように単純な詩『酔っていたまえ』でもそれは十分に味わうことができる。

いつだって酔っていなきゃならぬ。すべてはそこにある、それだけが問題だ。君の肩を砕き、君を地面におしつけるあの「時」の恐るべき重荷を感じたくなければ、いつだって休みなく酔い続けていなきゃならぬ。

しかし、何に酔うのさ。酒か、詩か、それとも徳にか、君の好みのままさ。でもとにかく酔っていたまえ。

そして、時に、宮殿の階(きざはし)の上で、お濠の緑の褥(しとね)の上で、あるいは君の部屋の暗い孤独の中で、酔いも醒めはて目ざめたときは、尋ねてみることだ、風に、波に、星に、鳥に、そして時計にも、すべて逃れ行くもの、呻くもの、転がるもの、歌うもの、語るものに、いったい今は何時なのかと。すると、風は、波は、星は、鳥は、そして時計も、君に答えるだろう。《今は酔っているべき時なのさ。「時」の哀れな奴隷にならぬためには、たえまなく酔うことだけだ、酒に、詩に、それとも徳に、君の好みのままに》と。

一読して感じるのはロマン派の星薫趣味への鋭い皮肉だ。そしてハムレットの一節を思い浮べることもわれわれの自由だ。「宮殿」「濠」「暗い孤独」、これらも使い古された道具立てである。ボードレールはそれらをこれでもか、これでもかと使い通す。われわれがふと、かれもまた本気に使っているのではないかと思うほどまでに。しかし、題からしてが皮肉なことに《酔っていたまえ》である。「酔い」はかくて二重の意味を帯びてそこに立ちはだかることとなる。

さらにこの詩の意識性をたしかめるためにもう少し立ち入ってみよう。すると酔う対象に微妙なずれがあることに気づく。先ず、酒、これはきわめて具体的かつ一般的である。詩、これは具体と抽象の中間で、かつやや特

そこから孤独をきらう気持が生まれてくる。――人は二になろうと願う。天才は一であろうと欲する。だから孤独である。

栄光は一人としてふみとどまることにあり、また、一種特別な方法で売春することにある。

（三二六）

そして、この考えをさらに進めて、ボードレールは「芸術も売春であり」、「神は売春の最たるもの」だというにいたる。「春をひさぐ」というきわめて現実的、具体的な行為が、もっとも高度に抽象的、超越的なものへと一挙にひき移されてしまうのである。ここに「自我の蒸発と集中について、すべてはそこにある」（この句と詩中の「すべてはそこにある」との通い合いに注目願いたい）（『赤裸の心』一）を照し合わせると、ボードレールの意図が那辺にあったかは想像にかたくない。かれにとっては「自我」の問題こそがつねに立ち帰らざるをえない重荷であり、又、休らいの境地でもあったのである。自分を徹底的に拡散させ、あらゆる人や物の核心に入りこむこと、これはかれの理想とする世界であった。文学の欠かすべからざる性格に先ずSurrealismeをおいたとき、かれはこのことを念頭においていたはずである。しかし、自我を集中し、拡散したものを収れんすること、これが文学、

殊な世界のものだ。徳、これは抽象的であり、かつ一般的ともいえるが、意識しないとこれに酔うということばを使うことは妥当ではない。つまり、この三つの対象はその性格がそれぞれ微妙に重なり合いつつ、かなりのずれを持ち、またずれながらどこかで重なり合っているのである。共通していることは他人よりも当事者にとってより必然的なものであり、自分を失わせるに十分なものだということであろう。ここで想起すべきなのは、あの『赤裸の心』にある《売春》という言葉である。

人の心の中にはやむにやまれぬ売春への趣味があり、

芸術にとってはさらに大切なことですらある。この意識的創作にかれはIronieを採用した。文学の第二の特色としIronieをあげたのも当然であるが、このIronieのもっとも典型的なあらわれがパロディであったのである。いろいろな研究が示すところによれば、ボードレールが、とくに『巴里の憂鬱』において常套句（poncifとかlieu commun）をきわめて意識的に使用し、その一般性、平俗性を利用して作品に重厚味を与えようとしたことは明らかなので、機会があれば追ってさらにいくつかの例をあげて行くことにするが、少なくとも、もう一つなすべきことはこのボードレールの独特の詩学が、どの時期に明確に意識されたのか、『悪の華』においてもすでに明白であったのかを具体例に即して論証することであろう。

（やまむら　よしみ・仏文科教授）

読者の広場に広く読者からの投稿を!!

投稿される方は次のように。

- 六百字以内。たて書き。書評に対する意見、要望、苦情など。
- 原稿は返しません。必要な場合はコピーを。
- あて先

〒565　吹田市千里山東三－一〇－一
関西大学生活協同組合
書評編集委員会

―連　載―

日本中国　ことばの来往（ゆきき）その4

芝　田　稔

「ネオン」のいたずら

中国語を習い始めてから半年以上も経って『急就篇』（明治大正から昭和十年代にかけて中国語初級用として最も広く使用されたテキストの一つ）をあげる頃になると、現地での日常会話も一段と身についた感じになってくる。そうなると、もっと語彙を増やしたい、そんな意欲が急に旺盛となる。メモ帳をポケットにひそめ、通勤途上であれ、仕事の最中であれ、場所も相手もかまわず、目に触れるものは何んでも、聞いてみたい、そんな一時期がやってくる。ちょうど幼稚園に上る前の子供のように。だが、そのために却って取りかえしのつかない失敗をしでかすこともある。

それは撫順でのある夏の夜、週一回の会話訓練を受けていた中国人先生の自宅の二階。いつものように所定の口頭練習が終り、ひと息ついた時のことである。日中の熱気はすでに退いて、戸外の闇がさわやかな大気を運んでくる。開け放たれたその窓の遥か彼方では、街の赤や青のネオンサインが、ウインクでもしているかのように、瞬（またた）いている。

その時、またも平素の訊ね癖がとび出した。

「那個什公＝あれは何んといいますか」

点滅しているネオンの方を指さして、私は先生に訊ねたのである。

先生は少し戸惑った様子であったが、すぐ明瞭なきれいな発音で…「ホン・ディェンヅ（この語音に漢字を当てはめると〝紅電子〟または〝虹電子〟となるであろうと思われる）」と教えて下さった。

〔因みに「ネオンサイン」は、外来語音の「ニーホン（霓虹）」とその性質や種類を表わす本来の中国のことば「ドン（灯）」とが結合して「ニーホン・ドン（霓虹灯）」といわれていることを後になって知ったのである〕

私は即座に、いま教えていただいたばかりの、この「ホン・ディェンヅ」を、何回もくりかえして練習し、いつものように先生の矯正を待っていた。ところがその時、このことばと同音異義の他のことばが、ふと私の脳裡をかすめたのである。

おや！　待てよ！　私はとんでもないことを先生に聞いてしまった。そしてとんでもないことばを女性の先生にいわせたのだった。と気を回した時にはもう遅い。気まずいやら、恥ずかしいやら。先生も私がしつこく練習している間に、或いは気付かれていたのかも知れない。発音の矯正はおろか、やり場を失ったその目を窓外のネオンに向けたまま。自分が教えた手前、いまさら引っこみがつかぬ様子のように、私には見えた。楽しいはずの勉強が、私のこの勇み足から完全に白けてしまったのである。

物事には、はずみという不思議なことがあるものだ。私は勉強のつもりで「ネオン」のことを尋ねたのだし、先生も素直に思ったままを答えて下さったにちがいない。お互いに善意の言語行動をしていたはずなのに、私が意外な同音語を知っていたばっかりに、お互いの間に気まずい感情の溝をつくり上げてしまったのである。以来私は先生を景慕していながらも、その溝を埋めることがで

きないまま、撫順を去ることになった。想えば四十五年前、青春に悔を残した「ネオン」にまつわる失敗談のひとこまである。

「賢人」か「ひまじん」か

同音語にまつわる失敗談はこのくらいにして、少し固い話にもどしておこう。

一九六九年九月、ノーベル財団がノーベル受賞者を中心に「賢者の会議」なるものを開き「世界における価値の位置」を主題として人類の未来を討議した。

この故知にならったのかどうか知らぬが、揺れ動く日米両国間の諸問題を討議し、未来の確立に資せんとする会議が設けられ、その名称を〝賢人会議〟と呼ぶことになったとなると、細かいことをいうようだが、この会議に参加するメンバーは、日米両国の〝賢人〟であり〝賢者〟である、ということになるわけだ。

それにしても〝賢人会議〟の〝賢人〟とは、あまりにも高慢(?)ないい方である。もっと謙虚な名称がありそうなものだ。というのが評論家細川隆元の意見であった。と私は記憶する。

ところで、この〝賢人会議〟の名称について、細川老

が話題にした時、私は中国の古い〝しゃれことば〟（喝後語＝シェホウ・ユイ）の一つを思い出して唖然とした。

中国語では「賢人」のことを「シエンレン」という。その昔、中国で「シエンレン＝賢人」といえば、それは「孔子さまのお弟子さん」と相場がきまっていたものだ。

（他是孔夫子的子弟＝彼は孔子さまのお弟子さんである）

というと、彼は「賢人（シエンレン）」ということになるので、表面は耳ざわりのよいことばとなる。だが、そこは〝しゃれことば〟なのである。

その心は「賢人」と語音も四声も全く同じの「閑人＝シエンレン」を指すのである。つまり仕事もなくてぶらぶらしている人、またはひまじんのことであり、時には「閑人冗進＝シエンレン・ミエン・チン（無用ノ者入ルベカラズ）」のように〝無用もの〟扱いにされることもある、どちらかといえば人を貶なすことばである。

日米両国間に生ずる諸問題を大所高所から討議せんとする〝賢人会議〟は「閑人会議」つまり〝ひまじんの会議〟であってはならない。だが〝日米賢人会議〟と銘を打って出られると、その漢字のイメージから、日本語音では高慢ちきな臭いがするし、中国の古い〝しゃれことば〟からは、あってはならないが、ありがちな臭いが漂ってくるのである。名は体をあらわすということばもある。名誉あるメンバーに推挙された〝賢人〟こそご迷惑

次号56号
投稿を募る！

テーマ●資本主義経済体制と教育問題
形式自由。字数制限なし。
締切り●四月三十一日
連絡先●〒565 吹田市千里山東三－一〇－一
関西大学生活協同組合
書評編集委員会 ☎（〇六）三八八一一一（内線 四八二一）

なことではないか、と思うのだが。

洗髪は「なぐる」のか

昨年十一月五日のこと、北京語で演ずれば、いや、共通語で演ずれば、中国の漫才界では随一といわれる侯宝林一行四名が本学を友好訪問されたのである。

初めて直に聞く侯宝林のことばは、ややしわがれて聞えるが、それだけに腹の底から出る力強さがあり、四声が明白で抑揚に富み、音の強弱とリズムが調和して聞きやすいことばである。後になって、その時の録音テープを再生してみたが、驚いたことに、あのしゃがれ声が一際冴えてよく透る調子の高い北京語に聞えてくる。確かに鍛えぬかれた魅力ある音声の持主である。

これで相方の郭全宝とコンビで自在に、しゃべくり漫才を演じるのであるから、行く先々で大聴衆を魅了し、その著書『再生集』の写真説明にあるような「笑的海岸＝笑いの大海原」を、至る所に現出していくことは想像に難くない。

ところが、このようなことばの大魔術師でさえ、ひとたび南方へ出て、上海や広州で同じように演じても、聴衆はさっぱり反応を示さない。たまに反応があれば、それは二十才代の青年に限られている、ということであった。

中国人同志でさえ、南と北とでは、ことばがそんなにも判りにくいし、時には誤解を生むこともある。侯宝林・姜宝琨・汪景寿共著になる『曲芸概論』の中から、そんな例を一つ。

甲…ぼくが上海へ行った当座は、思いちがいばかりしてましたよ。

乙…どうして？

甲…みんなのいうことがさっぱり解らないんだ。顔剃りや洗髪にしても、いい方がちがうんだもん。

乙…顔剃りをどういうのかい？

甲…修面＝シウ・ミエン。
乙…修面。洗髪は？
甲…聞いたらきっと驚くぜ！「汰頭＝ダー・トウ（頭をなぐる）」というんだ。
乙…頭をなぐるって？
甲…そうだ。ぼくが坐ると、顔を剃ってくれる。終ると、ぼくの頭を指していうんだよ。「じゃ、なぐりましょうか」とな。
乙…〔驚いて〕どうして、きみをなぐるのだい？
甲…ぼく考えたな。解放後、人をなぐることは禁じられている。顔剃りをして、おまけになぐられるなんて！
乙…きみ、聞けばいいじゃないか！
甲…聞いてやったよ。「ぼくだけか？ それとも来た客はみんなか？」
乙…どう答えたかね。
甲…みな、同じようになぐります。
乙…みな、なぐるって？
甲…みんな、なぐられるのに、ぼくだけ規則を破るわけにはいかんし。
乙…おや、おや。
甲…〔しかたなく〕「そんなら、なぐってくれ」
乙…なぐってくれって……。
甲…髪を洗い、ヘア・アイロンをかけ終ると、後から鏡を当てて「終りました。どうですか」
乙…終ったのかい？
甲…「どうしてなぐらないのか」と聞くと、その答えが「なぐりました」なんだ。
乙…「なぐりました」と？
甲…ちっとも痛くないんだ。〔乙に対して〕こんな思いちがい、なんとも、いやはや……。
乙…方言が解らないと、とんだ誤解を生むものだね。

――『戯劇と方言』より

（しばた みのる・中国文学科教授）

——連　載——

北京で生活して（三）

鳥　井　克　之

北　京　大　学

〔理科系学部〕その一

◎数学部…数学科、演算数学科、応用数学科の三学科が設けられており、修業年限はいずれも四年間である。

数学科…数学は現実の世界における空間形態と数量関係を研究する学問であり、自然科学のなかで重要な理論学科の一つである。科学技術の飛躍的な発展、とりわけコンピューターの出現は数学がより広範囲にわたり深く応用されることになった。伝統的な物理学と工学の領域のみならず、最尖端の科学技術の各領域および国民経済の各部門においても広びろとした未来を切り開くことになった。この巨大な発展は数学の基礎理論に対する、より広範でより深い研究を促すことになった。

この学科の学生は政治理論、外国語、体育の学習以外に、さらに解析幾何学、高等代数学、数学的分析法、微分方程論、函数論、確率論、一般物理学を学習しなければならない。これと並行して一定の科学研究の演習を行ない、数学の研究者と教育者の人材を養成するための基礎固めをする。

演算数学科…演算数学はコンピューターの誕生とともに

に、この二、三十年のうちに出現した新興の応用学問であり、数学の一分野である。それはコンピューターを武器として、生産と科学研究の中で提起された数学的な問題を解決し、経済建設、国防建設、科学研究において重要かつ広範に運用されている。

この学科の専攻生の基礎科目は数学科のそれとほぼ同じである以外に、主に演算方法を学習し、あわせて数値解析、数値計算の過程自体における法則性などの基本理論の学習に重きをおき、演算数学の研究者、教育者、技術者の養成のための基盤を築く。

応用数学科…この学科には応用数学と情報理論の二専修コースがある。とくに情報理論は現代数学の方法とコンピューターを運用してデーター通信処理の有効性と信頼性に関する理論と実践を研究する新興の学際的な学問である。それは通信、レーダー、マイクロ波、宇宙航行および国民経済の調整、管理に至るまでのデーター処理を必要とする各領域に対して、すでにあるいは現在まさに重要な影響を及ぼしつつある。

本学科の基礎科目は数学科のそれとほぼ同じであり、その上に通信工学、電子回路、情報理論などの専門科目が設けられており、通信、レーダー、データー処理などの各方面の系統的なプログラムに従事する研究者、教育者、技術者となる人材の基礎を築いている。

◎力学部…力学は物質の機械的な運動の法則を研究する科学である。機械的な運動とは物体の空間的位置の変化のことであり、自然界で最も普遍的で最も基本的な運動形態である。力学の研究は大自然と機械的な運動に関する神秘を明らかにするためにするどい武器を提供した。力学はその当初は物理学の一分野であったが、のちには発展して物理学とは異なった分業を担うことになったため、力学は物理学の多くの分野ないしは化学ともかなり密接な関連性をもっている。なお、力学は基礎科学である。

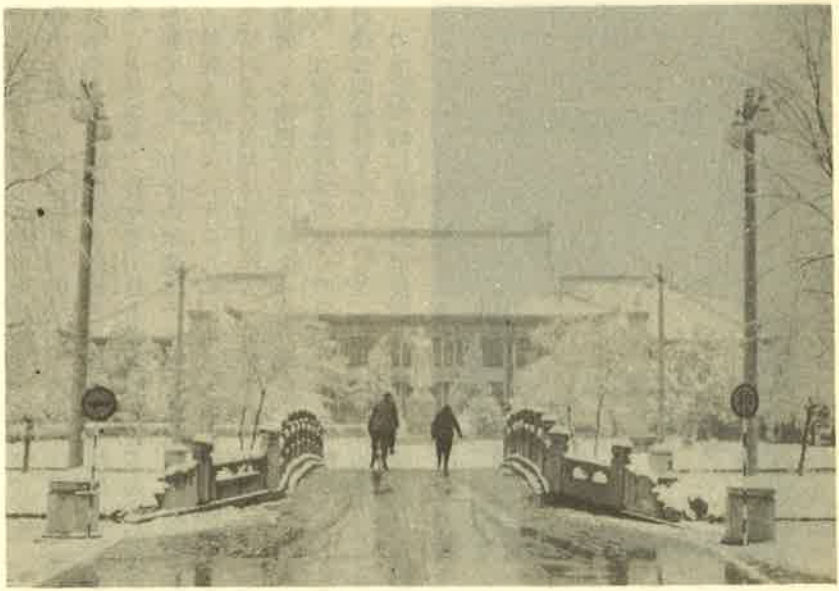
力学は同時にまた工学技術と広範な関連をもつ技術科

北京大学西正門にかかる毛主席の手になる扁額(奥に主楼が見える)

学であり、近代工学技術の理論的基礎でもある。近代の工学技術、たとえば超音速ジェット機、宇宙航行、新しい大型艦艇、動力機械、橋梁、ダム、高層建築、ミサイル、石油開発などの工学技術の急速な発展は、往々にして力学研究における進展があったからである。

力学部には力学科が設けられ、修業年限は四年間である。学生は在学中に政治理論、外国語、体育などの教養科目以外に、まず数学、物理学の面で堅実な基礎を固め、その後、理論力学、機械力学、弾性力学、流体力学、力学実験などの科目を系統的に学習する。高学年の学生はさらに固体力学、流体力学、構造力学、一般力学などの専門科目を選択履習しなければならない。卒業生は力学関係の科学研究、教育、技術の面に従事しうる。

◎コンピューター科学技術学部…コンピューターは科学研究、工業、農業、国防建設および社会生活の各方面において、ますます広範囲に応用されている。コンピューターの科学技術水準、生産規模および応用の程度がある一国の現代水準を測定するメルク・マールとなっている。コンピューター科学技術学部は主としてコンピューターのソフト・ウエアー、ハード・ウエアー、開発研究に従事する研究者、教育者、技術者を養成している。そのため、コンピューター・ソフト・ウエアー、コンピュータ



北京大学西正門に入るとすぐ正面に主楼(大学本部と講堂がある)が目に入る。

ー・ハード・ウエアー、マイクロ・エレクトロニクスの三学科が設けられている。いずれも修業年限は四年間である。

ソフト・ウエアー学科およびハード・ウエアー学科…この二学科は前期二年間は学科別に分けずに、学生は共に政治理論、外国語、体育などの教養必修科目を学習する以外に、主として数学、物理学などの基礎科目を勉強する。後期二年間はそれぞれ関連のある専門基礎科目と専門科目を学習して、コンピューター全体の構造、操作方法、演算工学(言語、編訳、プログラミング)、科学理論などの面において必要な学問を教授している。

マイクロ・エレクトロニクス学科…マイクロ・エレクトロニクスは新興の学際的な学問である。その主要な研究対象は大規模集積回路である。各種各様な複雑な論理計算をするために「LSI」などが必要とされ、それが大型電子計算機あるいはマイクロ処理機器の発展に大きく貢献している。「LSI」の各部分品の機能と原理は発振体の微積物理学における深い解明の基礎の上に築かれたものであり、その製造は精密なアトミック的な加工技術によって可能になったものである。さらに、その設計は演算工学の発展が提起した要求の基盤の上に打ち立てられたものである。

この学科の学生は堅実な物理学と数学の基礎を備え、コンピューターの基本的な知識を熟知し、半導体の物性、集積回路の設計、製造テクニックおよびその原理などの専門的な知識を掌握させるように教育している。卒業生は「LSI」の試作と物性の問題に関する研究活動に従事することができる。

◎物理学部…物理学は物質運動の基本的法則を研究する学問であり、それは自然科学と工学技術の重要な基礎でもある。二十世紀以来、物理学の発展がきわめて急速であったことにより、物理学の基本理論が革命的な発展をとげることを可能にしたばかりでなく、その他の自然科学に対しても推進的役割を果たすことになった。物理学における新しい成果はその他の科学技術のために、問題解決に必要な理論と実践の基礎を提供し、新しい科学技術領域を切り開くための条件を準備したのである。

物理学科…物理学部には物理学科が設けられている。色盲、色弱の学生は本学科を受験することができない。この学科では政治理論、外国語、体育などの教養必修科目のほか、さらに一般物理、理論物理、教学、実験などの科目を履習しなければならない。卒業生は科学研究機関、企業、大学、高校などで物理学に関する科学研究、教育、技術活動などに従事している。なお上記の基礎専

門科目を履習したのち、高学年では次の六つの専修コースに分かれている。

理論物理コース…物理学発展の過程において、理論と実践とは緊密に結合している。物理学の各分野における研究は、その大部分が実験運動によるものであるが、理論活動は実践を指導する役割を果たしており、それは不可欠なものである。近代物理学研究の実験と理論に対する要求がいずれも比較的高いことにより、数学と理論物理の基礎がよりすぐれている人材を養成する必要がある。そのことによって、理論物理の教学、基本理論に従事することもできれば、学んだ知識を運用して、実験活動をしている人たちと密接に協力して各種の科学技術活動をしうる人材を養成することになる。

レーザー物理コース…レーザーは今世紀六十年代以後に発展しはじめた新しい技術である。それは各部門の基礎科学に新しい実験研究の手段を提供した。レーザー光線がある一部の科学研究に応用されたことによって、マイクロ波工学、非線性光学などの新しい科学研究の領域が生まれた。また、各工業部門(たとえば通信、計測)、国防産業および医療などの方面でも、レーザー光線は広範囲に応用されている。現在のレーザー光線技術はまだ完全に完成された段階には入っておらず、新しいレーザー光線の系統も依然として出現しており、レーザー光線に関する基礎的な理論研究も今やまさに深められており、レーザー光線工業は正に形成期にある。このため、多くの研究されるべき物理学上の問題があり、大量の人材を必要としている。

磁学物理コース…各種の磁性材料は近代の電力、通信、

北京大学の西正門(頤和園に行く途中にバスの中から見える)

自動制御、コンピューターなどの工業部門や国防産業において広範に使用されている。新しい磁性材料と製品の発明と応用はたえず大きな技術革新を引き起こした。たとえばマイクロ波における酸化鉄の応用やレーダーの小型化などには大きな作用をしている。人工衛星などの最尖端技術などには特殊な性能を備えた磁性素材が必要とされる。これらの新しい材料や素材、製品の磁性を研究することが、近代の磁気学研究の基本任務である。

金属物理コース…金属および合金材料は近代工業と最新技術の基盤である。中国における農業、工業、国防、科学技術の「現代化」は各種の特殊な性能をもった材料を製造できるようになることを要求している。高い強度をもった、高温、腐蝕、放射線輻射に耐えられる材料は航空産業、ロケット技術、化学工業、原子力産業などの発展にとってかなり重要なものである。このため、金属と合金の物理的特性とその内部の構造および加工方法の関係を研究し、その物理的法則を掌握しなければならない。これがつまり金属物理学の任務である。多くの科学研究と工業部門ではこの分野の人材を求めている。

半導体物理コース…半導体物理学は物理学の中でもこの数十年の間に非常に急速に発展した若い領域である。トランジスターは半導体の表面的な性質を深く研究する過程で発明されたものである。この発明はエレクトロニクス技術の全貌を変えた。しかも集積回路、とりわけ「LSI」の試作は、万単位で数えられるトランジスターで組合わされた電子回路の機能が面積わずか数ミリ平方メートルの半導体の上に移しかえることが可能になったのである。半導体科学技術の発展は、中国の四つの現代化実現にとって重要な役割を担っている。当面する半導体製品と回路の発展には、半導体内部における電子の状態、表面と限界面、雑入物と欠陥および多くの新しいタイプの半導体の性質と機能とその原理に対する深い研究が要求されている。

低温物理コース…物理学の研究は、物体の温度が摂氏零下二百度余りにまで低下した時、その物理的性質に多くの重大な変化が発生することを解明した。たとえば摂氏零下二百六十九度になると、一部の金属と合金は電気抵抗が完全に消失し、超電導体になることが知られている。低温物理学は極度の低温下における各種の物理的現象の法則およびその応用における物理的な問題を研究する。低温物理学は最近の数十年間に新しく発展した学問であり、高エネルギー物理、核物理、電力工業およびその他の最尖端科学技術において、日ましに広範にわたって応用されることになろう。

◎技術物理学部…この学部には原子核物理学科と放射化学科の二学科があり、修業年限はいずれも四年間である。色盲、色弱、鼻炎、化学薬品に対してアレルギー症のある者はこの学部を受験することができない。

原子核物理学科…原子核物理学は原子核内部の運動法則およびそれらの法則の実際的な応用について研究する。それは二十世紀になって急速に発展し始めた物理学における重要な一分野である。国際的に見ても、この学問は高エネルギー核物理学、重イオン物理学として非常に活溌であり、一部の工業先進国では高エネルギー加速器、重イオン加速器を建設し、これらの加速器を利用して様ざまな核物理の基礎研究をしている。また、低エネルギー加速器を利用して固体物理、原子物理、輻射生物、輻射物理、環境分析における核技術の応用を展開している。

この学科の基礎課程は物理学科と同じである。学生は三年半の間に物理学科とまったく同じ課程を学習し、最後の半年間に原子核物理学とその実験科目を履修する。あわせて物理学科のその他の科目や固体物理学の科目を選択履修することができる。なお高学年においては量子論、粒子物理学、原子核理論、高エネルギー物理学、加速器、中性子物理学の選択必修科目が開設されている。

本学科の卒業生は科学研究機関、工場、学校および国防部門において、原子核物理学の科学研究、教学および核技術応用の分野で活動している。

放射化学科…放射化学と原子核物理学はともに原子力科学技術における二大基礎学科である。それは原子核の運動と化学運動の間の相互関連の法則を研究し、核エネルギー源、核武器および放射性同位元素の発展に対して重要な役割を果たしている。現在、世界の各国は原子エネルギーを広範に利用しており、核エネルギーはすでに人類にとって重大なエネルギー源となっている。最近の十年余りの間に、放射化学と密接なつながりのある放射性物質による標記技術と元素追跡の応用は、すでに化学物理学、生物学、医学などの基礎理論の研究および工業生産において、すでに広範に採用されている。

放射化学科は化学科から派生した分野でもある。最初の三年間の課程は化学科のそれと同じであるが、最後の一年間には、核物理概論、放射化学とその実験、放射性防護の諸科目を学習する。同時に開設されている核反応化学、量子化学、輻射化学などの選択必修科目を履修することになっている。本学科の卒業生は科学研究機関、学校、工場および国防部門において、放射化学の科学研究、教育、応用などの仕事に従事している。

（とりい　かつゆき・中国文学科教授）

連続セミナーの参加者を募集します

主催は、生協組織部と書評編集委員会の共催。
各回のセミナーの詳細は以下の通り

●第一回セミナー

テーマ…「私達の受けてきた教育とは何か」
時……四月十八日（土）～十九日（日）
所……京都伏見勝林院（山村教授宅）
参加する先生方
山村嘉己（仏文科教授）
小川雅也（仏文科教授）
田中欣和（教育学科教授）
費用……二千五百円（交通費、食事代、宿泊代込）
受付け場所
生協本部３Ｆ組織部にて（第二、三回ともここでやります）
しめ切り…四月十四日（火）

●第二回セミナー

テーマ…「現代文学論」
時……四月二十五日（土）～二十六日（日）
所……京都奥嵯峨
参加する先生方
小川　悟（独文科教授）
吉田永宏（国文科助教授）
費用……二千五百円（交通費、食事代、宿泊代込）
受付け場所…第一回と同じ所
しめ切り……四月二十日（火）

●第三回セミナー

テーマ…「学生運動とマスコミ」
時……五月二日（土）～三日（日）
所……京都大原野田家
参加する先生方
田宮　武（社会学部教授）
中農晶三（社会学部教授）
小原　仁（社会学部専任講師）
費用……二千五百円（交通費、食事代、宿泊代込）
受付け場所…第一回、第二回と同じ所
しめ切り…四月二十八日（火）

―連　載―

差別落書問題をめぐって(3)

田宮　武

児童文学『隣の家の出来事』を読んで

昨年の秋ごろ、大学前の書店の店頭でパラパラと目をとおした『朝日ジャーナル』の書評欄で、一見すると辛口ホームドラマを想像させるような書名のこの本が、ユダヤ人に対する偏見と差別的迫害を描いた児童文学であることをはじめて知った。そういえば、岩波書店がこのごろ黒表紙の新しい児童文学シリーズを刊行しはじめていたようだが、その一冊かと思い出して購読してみる気になる。手にとってみると、「あたらしい文学」と名づけられた新シリーズは、主として中・高校生あたりを読者対象にした、いわば硬派のジュニア小説といった内容の作品を集めている。

作者のヴィリ・フェーアマンは一九二九年に西ドイツで生まれた人で、主として人種差別、戦争、出かせぎ労働者問題などと、アクチュアルな問題に取り組むと紹介されている。訳者あとがきによると、この小説は作者が考え出した架空の物語ではなくて、一八九一年ペトロとパウロの祝日に、ライン河沿いのクサンテンという田舎町で実際に起こった幼児の変死(殺人)事件を素材にしている。この事件をタテ糸にとり、隣人たちの手によってその容疑者としてでっち上げられていくワルトホフというユダヤ人一家に対して加えられた猜疑と憎悪のかずか

ずの行動をヨコ糸にしながら、物語は展開していく。

ジュニア小説なので、このユダヤ一家の一三歳になる息子と、その息子との友情関係をずっと持続していくドイツ人一家の少年とを主人公にしているが、作者が描こうとしたテーマは、『ドイツの田舎町を包みこんだ人々の狂気と、少年たちの苦悩を描いて、ナチスのユダヤ人差別をささえた民衆の心理的基盤をえぐる』ところにある。読んでいくうちに、日本でもよく似た事件が現に起こっていることに気づく。この中で描かれている問題は、狭山差別裁判の石川一雄さんや島田事件の赤堀政夫さんを犯人としてでっち上げていくのに一役かった官民一体の部落民や障害者に対する差別観念の非合理性と非人間性をえぐることにも通じるように思われる。そのような意味で、この小説はきわめて今日性を持っているわけである。

荒筋をおってもあまり意味がないので、作品の中からわたしの印象に残ったいくつかの会話や叙述をぬき出して紹介してみよう。

幼児が何者かに殺されたというわさが町中に流れたその夜、家畜商であり墓石を彫る仕事をしているユダヤ人一家の夫妻は、妻の父親が子殺しの罪をきせられて死んでいった過去を思い起こして、やがてふりかかってくるかもしれない恐怖を語っている。

「でも(妻の)お父さんは、犯行の日には町にいなかった、という証しを立てることができたじゃないか。」

「もちろんその証しは立てることができたわ。でもみんながほしいのは証しじゃなくて、犯人なのよね。それも、みんなとは毛色の違った人間、みんなの共同生活からはみ出している人間がほしいのよ。たとえば、別の宗教を信じている人間とか。人々のまなざしが変わり、歩道で行き合うとそっと避けたり、つばを吐いたり、子どもたちの目に恐怖が浮かび、知り合いはだんだんと身を引いてゆき、商売は衰え……」(一四〜一五ページ)

という会話から思い出したことは、日本人は朝鮮や朝鮮人について歴史的事実や実態に裏うちされた認識を欠いている半面で、実にさまざまな朝鮮観、それも多くの場合、ステレオタイプ的で誤った考え方を持っているという指摘であった。いつだったか、総合コース「部落解放論」の受講生と話し合っていて、「あの人たちが差別されるのは自分たちが結講悪いことをしているからや」という差別当然論の意見に出くわし、「どんな悪いことをしたのや」とたずねてみたことがあった。すると、「自分がいつも乗る電車で民族服を着た朝鮮人の高校生が座席にわがもの顔に座っている。あんなことをしていては…」という返事で、その大学生のいだいている朝鮮観に唖然としたというか、慄然とした記憶がある。

次に、小説の中でユダヤ人一家の娘が恋人といっしょに舞踏会に出かけた会場で、ドイツ人が二十人あまりのユダヤ人に対して「人殺しを追い出せ！」「ユダヤ人を追い出せ！」「子どもを殺したやつらをやっつけろ！」とのしり、襲いかかってくる。会場を逃げ出した娘の安否を気づかって訪問してきた恋人と娘の母親との会話も、いろいろと考えさせられる内容である。

「あちらは、しまいにどうなったの。」

「それがねえ。プフィンクステンの息子はめちゃくちゃになぐられて、運び出されて行きました。ユダヤ人はみんなやられました。」

「それからどうなったの。」

「それからですって？　今はまたダンスをしていますよ、何事もなかったかのように。」

「でも、まさかみんなが、そこで起こったことをのんびり見物していた、なんて言うんじゃないでしょうね。」

「のんびり、ですって。さあ、それはわかりません。でも、見ていない人は、いっしょになぐっていました。」

「中に割って入るような、分別のある人はひとりもいなかったんですね？」

「ええ、いませんでした。『分別ある人たち』はもしかすると逃げ出してしまったんでしょう。でも、そういう人は大勢はいませんでしたよ。それは間違いありません。」（一三九～一四十ページ）

先に紹介した「部落解放論」受講生との話し合いの中でも、露骨に差別意識を口外する者はほんの少数であるのは事実で、多くの者は「えったは死ね！」「朝鮮人韓国人は死ね」といったたぐいの差別落書を読んで、大学生がこんなことを書いたとは信じられないと感想を述べる。そして、なかには「そんな落書をするのは普通の人間じゃない。どこか異常な人間のやることや」とまで、

差別落書を書いた他者を非難する者さえいる。「差別してはいけない」「差別はいけないこと」のタテマエをほとんどみんなの大学生が身につけて、その一言でどんな差別問題も片づけようとする。識者によっては、このような程度の人権意識が広がっていることを民主主義感覚の定着として評価する場合もあるが、はたして、そうだろうか。

この小説のユダヤ人一家の家畜商が幼児変死事件の数日後、長く取り引きのあった牧場主のところへ出かけて牛を買いつけようとすると、「それはもう無理だと思う」と断られてしまう。善人そうな牧場主は「近所がうるさくてね、おれがあんたとよく取り引きをするものだから」といい「でもなあ。おれだって流れに逆らって泳ぐわけにはいかないんだ」ともいい、最後に「この事件が片付いたら、またいつでも来てくれよ」(七四～七五ページ)と語る。先の舞踏会の模様をたずねた母親の「まさかみんなが、そこで起こったことをのんびり見物していた、なんて言うんじゃないでしょうね」という叫びにも近い詰問とをあわせて考えてみる。そこに浮かび上がってくるのは、民衆のいだいている「なるようにしかならない」といった大勢(というか体制)順応主義の気持であり、「どないなるんやろうか」といった第三者的というか傍観者的な立場であるように思う。

何度も引き合いに出すが、「部落解放論」受講生との話し合いでも、表現の仕方は違うけれども、おそらく一番強く感じるのは、「こんな差別落書を書く人間は悪い、どうかしている。けれども、解放研の人は差別、差別といって騒ぎ立てすぎる」という発言に代表されるように、自分自身が部落問題にどのようにかかわるのかを欠落させることによって、安全地帯の見物人になってしまう。あるいは、「部落差別が悪いと誰でもいっているのに、いまだに部落差別が残っているのは、部落民自身の方に問題があるからではないか。部落民や朝鮮人に非がなけれ

ば差別されないでしょう。差別されるのは差別される者に責任がある」と差別の原因を差別される側に求めて、責任を他者に転嫁してしまう傾向が強い。いずれも、差別してやろうとの露骨な意図は自覚していなくても、結局のところ、差別に荷担していくことになるのではないだろうか。

おそらく、作者のフェーアマンがえぐろうとした「ナチスのユダヤ人差別をささえた民衆の心理的基盤」には、「追い出せ！」と叫ぶ人種差別主義者の観念や行動だけではなく、それを黙許した多数の民衆の「のんびり見物していると結構おもしろい」とか「かかわり合いになると損をする」といった傍観者の姿勢も含まれていることは明らかであろう。「部落解放論」の担当者の一人として「しんどい」と感じるのは、後者のような見物人の姿勢を持ちつづける学生が多いことと、そうした学生の考え方や生き方を変革していく有効な手立てを作りあげえないでいることである。

最後の引用になるが、ユダヤ人の家畜商は幼児の殺人容疑で逮捕され、裁判所の審理に次々と証人が呼び出されている。最後の証人に立った、娘のかつての恋人がやっと家畜商のアリバイをはっきりと証言したために、無罪の判決が下される。その審理のおり、弁護士は次のような警告を述べた。

「結局のところ、人間性と人間ひとりひとりを重んずる気持が、あらゆる人の胸と頭に根を張らない限り、こうした運命はだれの上にもふりかかるおそれがある。」（三一六ページ）

「差別は他人事ではない、自分自信にかかわってくる問題である」という作者の信念は別のところでも表明されている。家畜商の息子に向って、その友達でありつづけたドイツ人の少年が自分の父親から聞いた話として語った次のような言葉にも見られる。

「カール、ほんとにそう思っているのかい、ぼくたち

の身の上に起こったことだけど。」

「だれがそんなことを冗談でいえるものか。とにかくぼくは父から聞いて、よくわかった——今日きみたちの身の上に起こったことは、同じことがあすは別の人の身に起こりうるんだ。人はすべてを高い望楼からよく見ていなくてはいけない……」(二九八ページ)

といい、こうした人種差別を二度と起こしてはいけないと考えて、教師になろうと決意するわけである。

作者の人種差別に対するこのような考え方は『隣の家の出来事』という書名に集約的に象徴されているように思われるのだが、差別問題は部落民、朝鮮人、障害者の権利侵害であっても、自分とは無関係な他人事であるという普遍的に見られる安心感に対する一つの警告と受けとれるだろう。部落差別が実は部落民ばかりではなく、他者の権利をも抑圧するものであるという歴史的事実として思い起こすことは、筑豊の元炭鉱住宅に住むルポライターの上野英信によって紹介された、戦前の「肉弾三勇士」にまつわる坑夫たちの証言であろう。詳細については、『天皇陛下萬歳——爆弾三勇士序説』(筑摩書房)を読むようにすすめるが、第一次上海事変(一九三二年)のおり、北九州出身の三人の兵士が爆弾筒をかかえて鉄条網に突っこみ爆死した事件は中国への侵略戦争の中で美談化され、三人は「軍神」にまで英雄化されていった。

いつごろか、この三人の戦死者の中に部落民がいたらしいというわさが人の口から耳へと広がっていく。このうわさは部落民に対しては「自分たちと同じ部落民から日本一の軍神が生まれた」という誇りを持たせ、そしてその誇りを逆手にとって為政者たちは部落民を根こそぎ「聖戦」へと駆り立てていくのに利用したといわれる。また、このうわさは民衆の差別意識と連動して、「部落民でさえあんな勇敢なことができるのに、ましておまえらには……」と叱咤されては、軍隊内では戦意高揚のために利用され、炭坑内では坑夫の労働強化と抑圧の道具として利用されていったという。

部落解放同盟が「部落差別とは何か」をめぐって提起した、いわゆる三つの命題の一つに「部落差別の社会的存在意義」があるのを思い出した。部落差別が存在し、いまなお存続しつづけている原因は、部落民の市民的権利の浸害をテコにして労働者を搾取し、抑圧するための「沈め石」として利用するためであるといわれる。こうした命題を明らかにする具体的事例を堀りおこして、諸々の差別を受けている当事者をこえて、差別の状況はすべての人びとの「わが身」にふりかかってくるものであることを感性で理解できるようにしたいものである。

一つの差別は他の差別の強化へと連動していく差別の重構造の仕組みとは逆に、一つの差別からの解放が他の差別解放へと連帯していく側面も存在することを最近になって知った。それは、一九八一年度をもって期限切れになる「同和対策事業特別措置法」の強化改正をめぐる資料を読んでいて、「なるほど」と納得できた事実である。

「同和対策事業特別措置法」強化改正要求国民運動中央委員会という大変長い名前の団体が編集している『部落差別の実態と「特別措置法」強化改正』（部落解放同盟）や『部落解放』一九八一年二月号の記事でも紹介されていることだが、特別措置法の成果の一つに、他の被差別者に与えた影響があげられるという。それによると、部落解放運動の人たちがアイヌ解放運動家と交流した時に聞いた話として、北海道開発庁と北海道民生部が担当して、「同和」対策一年とも、二、三年ともいわれていてはっきりしないが、少し遅れてウタリ対策を実施している事実が報告されている。「同和」対策を手本にして、アイヌに対する差別をなくすために、奨学資金制度を作り、住宅資金貸付制度を作り環境改善の事業をやっているわけである。

話を元にもどして、『隣の家の出来事』に関連することで、大変興味ぶかいというか、むしろ驚くべき事件が、一九八〇年一二月大阪で開催された「国際人権シンポジウム」に出席したフランスの研究者、カトリーヌ・カドゥによって報告されている。それによると、フランスはまだまだ反ユダヤ主義の強い国で、特に経済不況になると反ユダヤ主義という人種差別が頭をもたげるという。そして、現在はちょうどその時期で、いろいろな差別事件が引き起こされる。その一つの具体例として、「あのユダヤ人の店主は、国際的な売春婦の取り引きをしているから、あの店の女性客は、誰も知らないところへ売りとばされてしまうぞ」といったひどいうわさを何度も流されて、しかも、そのうわさは地域の人びとに浸透し、受けいれられていって、結局ユダヤ人の店はボイコットされてしまうという差別事件を取りあげている（『部落解放』同号、七二～七三ページ）。

一八九〇年代のユダヤ人差別を描いた『隣の家の出来事』に見られるのと全く同じ差別観念が現在にいたるまで連綿と受けつがれ、生きつづけていることが理解できる。それは部落差別についても、朝鮮人差別についてもあてはまり、「こわい」「悪い」等々といった差別観念が存続してきているように思われる。しかも、そうした中核になるような差別観念の周辺に「差別問題については知っているけれども、自分とは関係ないことや」といった傍

観者の立場をとる者がなお多いだけに、意識変革の仕事は手ごわいといえるだろう。しかし、教師がそのしんどい課題に取り組まなければならないことはいうまでもない。

差別意識と教師の課題　私も少し担当している総合コース「部落解放論」受講生との話し合いについて折にふれてすでに紹介してきた。そもそも「差別落書問題をめぐって」というこの短い文章は本当のところ前回で終わるつもりでいたのだが、この話し合いの中で出された受講生の発言を聞いているうちに、もう一度再考してみようという気持ちを強くした。

「部落解放論」では数年前から担当者全員と受講生が互いに意見を交換する場を〝まとめ討論〟という形で年二回持つようにしている。その前期の話し合いがそれぞれのクラスとも二、三十人の学生を集めてもたれた。

差別落書に関する共通討議資料『人権意識を高めるために』は受講生に配布されておらず、部落解放研究会が用意した教枚のガリ版資料をもとにして、学生の司会で行なわれた。〝まとめ討論〟は差別落書の問題をテーマにして、自由に思っていること、感じたことを出し合うという約束ですすめられた。沈黙がややもすると支配がちになるので、全員が少なくとも一言は発言するように求められていくうちに、だんだんと大学生の持っている部落差別観が浮び上ってくるように感じとれた。

すでに紹介したところと重複するかもしれないが、当日の発言メモにもとづいて、受講生の部落差別や差別落書についての考え方をおおまかなタイプに分類してみよう。次のように、差別をなくすために自分は取り組みたいと決意する者から、差別されるのは差別される者が悪いからでしょうといった差別当然の考え方まであり、差別落書と同じような露骨な差別発言はなかったものの、実に考えさせられた。あわせていうと、後期の〝まとめ討論〟をみても、印象としては、よく似たような意見が出されていたと思う。なお、解放研の作ったガリ刷には、一九七八年六月十四日に学舎トイレで発見された「日本に住む権利のない部落民を焼き殺せ」ほか二つの差別落書の具体例が紹介されていて、それらの落書を読んで感じたことから話し合いを始めたわけである。

(1)「差別されるのは差別される者が悪いからやろ」という原因転嫁論

——(差別落書を)書いた人が悪いと思うけれども、実際に真剣にこれを書いた人がいれば(悪いか)どうかな。部落民や朝鮮人はよく問題を起こす。この人たちは

一般に考えられないような犯罪をやっている。落書を生みだしているのは、部落民や朝鮮人が結構悪いことをしているからだと思う。そうだとすれば、部落民や朝鮮人から被害を受けた人が書いているのではないか。

——部落問題が悪いと誰でもいっているのに、部落差別が残っているのは、部落民自身の方に問題があるのではないか。朝鮮人に全く非がないのであれば、差別されないだろう。差別されるのは差別される者に責任がある。

——部落問題は悪いといって議論しているだけでは、問題の解決にならない。部落が差別されるのは部落が悪いからである。その根拠は僕たちに被害を与えているからであるという事実を示すから……電車の一輌を部落民とか朝鮮人とかで全部とって座わるので、反感をおぼえる。

——（差別落書を）書いた人は恨みのある人ではないか。僕の友人に朝鮮人はきらいやという人がおって、それは中学生の時に朝鮮人の同級生にリンチにあった人で、そうしたことから朝鮮人に対する恨みを持っている人がいる。僕はその友人の影響を受けている。

(2)「差別するのは人間の本性」という差別当然論

——高校の時に「あほや」と書かれたし、そんなに気にしない。慣れてきたので、腹立たしくなかった。自分

でもどうしようもないので、あきらめる。

——差別の原因は優越感にある。自分より下の人間を蔑視したいという気持ちのあらわれである。入試のおりに、下位の者より満足感を持ち、下位の者を見くだす。

(3)「こんな差別落書は冗談で書いたのだろうから、大騒ぎする必要はない」という差別容認論、または解放運動否定論

——まじめな考えで書いているとは思えない。ふざけて書いていると思う。

——差別落書と騒ぎ立てるのではなく、関大ぐらいのレベル(の学校)になると、面白半分に書いたものと思う。これに対して解放研の人は騒ぎ立てすぎる。

——解放研が差別落書を取りあげて問題にすると、また解放研をからかってやろうとか……本気で書いている人はいないのではないか。小学生の頃より、差別は悪いと教えられていて、差別は悪いとわかっているから、だから冗談半分に書いているのだろう。

——(差別落書が)確認されるまでに落書を発見した人が落書を消した方がよいのではないかと思う。書いた人は、今喜んでいるのではないか。自分の落書が成功したと思っているのではないか。落書について大げさに取りあげる必要がないのではないか。落書を見つけた人がそっと消しておいた方がよい。

(4)「差別問題はピンとこない」という傍観論

——講議の中で取りあげられた差別事件を聞いて、この落書をみて怒りを感ずる一歩手前で……なんの目的で書いたのか、冗談で書いたもののように思う。もう少し差別に対してピンとこないものがある。冷たい言い方だが、ピンとこない。落書を見ても、バカなことやぐらいしか分からない。

——(差別落書を自分にもされると)腹が立つと思うが、その時になってみなければ分からない。

(5)「部落を意識したり、こだわりたくない」という自己防衛論

——あいつは部落だから、という意識を持たなければよいのではないか。

——部落差別意識をなくすのは無理だが、解放運動にたずさわっている人は差別意識を持っていないだろう。部落民、一般民という意識を持たない方がよい。

——結婚相手が部落民であっても、部落なんか関係ないんだと意識しなければ、同じ人間だから関係ないんだと思う。

——部落民、一般民という区別のことばを使うからおかしい。そんな部落民云々といったことばや意識を持た

ない方がよい。

——部落民か朝鮮人か、みんな同じ人間だから部落民といったことを意識しない方がよい。

(6)「ひどい内容である」と受けとめる批判論

——書いた人の気持ちが分からない。内容を見ると、〝こわい〟感じがする。

——落書を書いた人の意識が分からない。

——これを見た時、ゾッとした。差別性を自分も持っているし、講義を受けて自分の差別性に気づいたのだが、その落書を見るとゾッとした。

——「焼き殺せ」といった落書は恐ろしい。考えられないことだ。

——腹立たしい感じ……こんな落書者を育てた社会体制自体が腹立たしい。

——落書を見たことがないが、信じられない。

(7)「差別を正しくとらえ、自分の問題にしたい」という解放論。

——受講生は部落問題についての知識をつけるだけではなく、部落差別をなくそうという姿勢が大切である。

——現実に差別意識をどのようにして変革していくのかの道すじを明らかにすることが大切である。

——差別落書に対して腹が立つのが普通で、どのように部落差別をなくしていくのか方法を考えた方がよい。

——明らかな意図のもとに差別落書を書いたものと思う。社会構造の矛盾とのかかわりを考えてみよう。

——冗談で書いたとしても、部落民、朝鮮人が死ぬ思いをすることを無視して、知らないで、差別落書をするのは問題。差別語を知らなかったとか死ぬ思いをしているという実態を知らないですませてはいけないと思う。差別は人を殺すということを知るべきである。

——差別落書の起こる背景には、差別意識と差別の社会的現象があるので、差別の実態をなくしていかなければいけないと思う。差別意識をなくしてほしいと思う。

——糾弾の意義をとらえ、生命の尊重をもっと議論すべきである。そうしたら、こんな冗談めいた落書は出てこない。

以上のような意見のほかにも、紹介しなかったものもあるし、多分メモに書きもらしているものもあるだろうが、差別落書にみられるようなきわめて露骨な差別観念ばかりが問題なのではなく、その差別観念を容認し、支持し、場合によっては自らも差別者になっていく危険性を持つような意見まで存在しているのに気づいた。大学の「部落解放論」とて、高校までの解放教育の理念と変わるわけでなく、端的にいえば「差別を見抜く目」と

「差別を許さない力」を一人ひとりの大学生が自分のものにしていくところにあるだろう。そうすると、他者をすぐ合否の判断で見る教師の習性は捨てた方がよいのかもしれないが、解放教育の目的にてらしてみると、先に紹介した差別批判論と差別解放論が「合格」するのみといった状態ではないのか。教えた者に「不合格」を出すことは、同時に教える立場にある者の「不合格」にも通ずるのかもしれないが、それでも、なおかつこの手ごわい相手に向ってひきつづいて取り組まなければならないと思う。

谷口修太郎講師によると、部落に対する差別的偏見・観念は三つに大別でき、① 人種起源説の「生まれがちがう」「血筋がちがう」という考え方 ② 宗教起源説や職業起源説と関係する「けがれている」という考え方 ③ 「こわい」という考え方をあげて、その歴史的形成の過程を明らかにしている。「部落解放論」の講義では、これらに「部落はきたない」という差別観念をつけ加えたと記憶している。

各地の地方自治体が実施した部落問題意識調査の結果をみても、こうした差別観念が根づよく浸透していることが理解できる。文学部教授の田中欣和の近著『解放教育論再考』(柘植書房)を読んでみて、興味深かったのは、差別意識の問題について私と同じようなことを感じている点であった。同書の「今日の部落差別」という章によると、先に紹介した「伝統的差別意識」が存続するのはもちろんのこと、現在の社会構造の中で差別を再生産するものとして、さらに「今日的差別意識」といえる社会意識が存在しているという。そして、 ①特定の人間の行動から、すぐに部落全体へと一般化していく「不当な一般化としての差別」 ②世間体や家族・親族の差別観に引っぱられていく「同調型差別」 ③自分の利益にからんでくると差別する側にまわりやすいような差別意識 ④「自分の生活程度が〝中〟と考える日本人が九割

もいる」という中流意識にもとづく「上」「下」の感覚、という四点について具体例をあげて説明している。

今日的差別意識は意外に若者の頭の中に芽ばえつつあるようだ。埼玉県上福岡三中で起こった林賢一君の自殺は、真相究明の結果によると、同級生が林君は朝鮮人で、家庭の仕事は清掃業であることを知っていて、「くさい」「近寄るな」といじめたおし、自殺へと追いこんでいったものである。そうした民族差別・職業差別にもとづく「いじめ」という事件はどの教育現場でも起こりうるといわれる。一九八〇年八月に開催された第二回在日朝鮮人教育研究全国集会の報告（『解放教育』一九八〇年十二月）を読むと、中学生の意識のありさまが浮かび上ってくる。

弱い者いじめについてどうするかと聞くと、「仲間はずれになりたくないから、見て見ぬふりをする」「いじめる側に立つ」「その人が友だちだったら、いじめをやめるかもしれない」「やめる子は、自分はいい子だと見せたがっているのや」という声が返ってくる。さらに、クラスに在日朝鮮人がいればどうするかと問うと、「たぶん差別してしまうだろう」「差別する仲間にはいらなかったら自分が差別されるので、やっぱり差別してしまう」という意見がほとんどだったという。また、別の中学校の報告によると、在日朝鮮人の就職差別などに関しては「朝鮮人が差別されるのは当然だし、その方が日本人にとって都合がよい」といい、「障害児とか、できん奴のことばっかりかまっているのもええけど、もうちょとできる奴のことも考えたらええ」というすさまじい意見も出てくるという。

教師も家庭も子どもにも、進学のための受験競争の中で、点数による序列づけだけで子どもを評価していきがちな硬直した状況がますます強くなる。子どもたちはそうした窮屈な抑圧感から一時の〝解放〟を求めて、自分

たちより弱い立場に置かれている人間をいとも無邪気な顔をして差別し、差別されることの傷みに気づこうともしないのだろうか。

話はとぶが、同和対策事業特別措置法の強化改正をいま要求する根拠の一つとして、この十年間に部落の環境改善などの事業に一定の成果を生みだしたが、なお、部落の仕事保障、人権確立、社会啓発、解放教育といった領域等はむしろこれからの課題であるとよく聞く。大学の中でいくらか解放教育の仕事にかかわっている者の実感から考えても、社会意識としての差別観念を克服していくことの重要性と、それにもかかわらずほとんど手付かずの状態であることを痛感する。

次のような疑問点を明らかにしていきたいと、漠然とだが思っている。

ひとつは、伝統的差別意識や今日的差別意識の形成過程(原因)と構造がどうなのかということ。毎日新聞記者の八木晃介の『差別の意識構造』(解放出版社)はきわめて包括的で難解であるが、さしあたって読み返してみたい参考文献になるだろう。差別意識の構造についても、差別事件を検討していけば明らかになるだろうし、自分の身のまわりの人々の考え方を注意深く聞いておれば、いくらか実感として分かるところもあるだろう。また、客観的なデータなら、地方自治体が実施した「部落問題意識調査」はどこでも同じような設問をしていて紋切り型だけれども、参考になるだろう。

二つめには、そうした社会意識としての差別観念を変革していくための実践的プログラムは何かということ。大学での取り組みではないが、岐阜市立岐北中学校の「同和」教育の実践記録『岐北の教育』(第一集～第七集)で報告されている、中学生の部落差別に対する意識を変革し自分の問題にしていく行動化の試みとか、解放教育の実践報告とかをあらたに勉強してみたいと思う。

先の『解放教育論再考』の著者は解放教育の課題を次のように提起している。「部落解放教育、あるいは広くいって反差別教育は、差別が悪であり、非合理であることを啓蒙するにとどまらず、今日の社会に生きるものを多かれ少なかれ拘束する差別の構造に積極的に逆らいかえす態度と力量を形成しなければならない」(同書、四四ページ)と。

「人間には他者を抑圧し、差別する自由はない」という言葉、「他者を抑圧し、差別する人間には、自由はない」という言葉をこのさいかみ締めるべきであろうと、自分に言い聞かせる。

(たみや　たけし・社会学部教授)

―連　載―

ポーランド

―その歴史と風土　その一

松川克彦

トルストイが『戦争と平和』の中で述べているように、ヨーロッパの諸民族は頑固ともいえる自信に支えられているという。例えばイギリス人。その自信の強さは、イギリス人であるという事実そのものからくるものである。イギリス人である以上、その行為は誰がみても立派であると考えているところにあるらしい。フランス人の自信は、自らが誰に対しても魅力的であると考えているところにある。またドイツ人のは、自分達が真理を完全に把握していると考え、自らが考え出した科学を絶対的なものとみているところに育った自信であるとしている。トルストイはその母国であるロシア人の自信の強さについては、極めて簡潔に、全くの無知からくるものであると述べている。

ポーランド人については、モスクワに攻め上ろうとするナポレオン皇帝が国境のヴィスワ川に大軍を集め、各軍隊が次々と橋を渡ってロシア領にはいっていく場面であげられている。ポーランド騎兵も渡河の順番を待っているのだが、皇帝の面前、はなやかな大軍勢、といった雰囲気に勢い込み、雪どけ水を満々とたたえた川にとびこみ対岸へ泳いで渡るのである。ポーランド人司令官は、この渡河によって幾人かの部下を失ったが、その勇敢な行為によりナポレオンより勲章を授与されたとある。

ポーランド人の自信は、血の気の多さ、ロマンチストであること等からくるものと言えるであろう。ナポレオンと共にモスクワ遠征に参加、スペイン、アフリカを転戦し、後にはまた、パリコミューン、更に数度に及ぶ対ロシア蜂起等、ポーランド人は分割による国家の消滅という事態に直面して、世界的な規模で行動し、独立を求めて列強に対する反抗を繰り返してきた。

現在ポーランドとドイツの国境であるナイセ川の上流は、巾一メートルにも満たないほんの小さな小川である。しかし、これを越えれば向こうはドイツで、言葉は勿論、人間の顔つき、服装等ガラリと変わる。オーデル・ナイセはゲルマンとスラヴの境界であるからこの変化は当然としても、同じスラヴ民族に属するロシアとポーランドとの国境でも事は同様である。こちらの国境ブグ川をブレスト・リトウストで越える旅行者は、独ポ国境と同じく大きな変化、空気の色までもが変わったことに気づく。国境の小さな川は、政治的境界以上の意味をもっている。

元来、これら隣国同志の関係は一般的に良好とは言えず、文学作品の中においてもそのことがみられる。例えばドストエフスキーは『カラマゾフの兄弟』に登場してくる二人のポーランド紳士を、量見の狭い、しかし気位いだけは高い、いかさまトバク師として描いている。またチェーホフも、ポーランド語の堅い発音が気にいらなかったようである。

ポーランド側にしてみれば、ロシアもドイツも分割列強、いずれも敵であって、勿論好意を持てるはずがないことは理解できる。対独、対露政策が、ポーランドにとって最も避けなければならない事態とは、ドイツとロシア相互の関係の極端な良好さ、または破局であった。つまりポーランドにとって、その両隣国同志がポーランドに敵対するために接近すること、また両隣国同志の関係が悪化してポーランドが戦場となる可能性、この両方を避けなければならなかった。

シュクラルスカ・ポレンバ

ポーランドにとって都合の悪いのは、トマス・マンの作品『魔の山』にあるような例である。御存知のようにこの長い小説には、ドイツの青年ハンス・カストロプがスイスの結核療養所においてロシアのショーシャ夫人と知りあい、恋におちいる場面がある。ショーシャ夫人は、扉を閉める時に騒々しい音をたてたり、爪をかむくせがあったり、食事の時間に遅れてきたり、ドイツ中流階級の厳格な教育をうけているカストロプ青年の属する社会では受けいれられないようなふるまいをするのである。従って結婚というようなことは、問題外である。しかしカストロプは、そのような相違がある故にかえってショーシャ夫人にひきつけられていくのである。

マンはいみじくも、異質であるためにかえってロシア文化にひかれるドイツ人の心情をあらわしている。ここに、理知に基づいたドイツの冷静さと、ロシアの混沌たる無知の自信が結びつく下地ができあがるのである。すでに十八世紀以来の分割の歴史は言うにおよばず、二十世紀になっても独露両国はラパッロ条約（一九二二年）独ソ不可侵条約（一九三九年）等、ポーランドを対象として結びついてきている。

これに対してポーランドは、西側の国では伝統的にフランスと接近していく。ドイツに対抗するためにとられた仏ポ両国の軍事的、政治的、また文化的結びつきは強いものであった。またポーランドは東側ではロシアに対抗するために、日本との接近を望んできた。日露戦争に際しても、日本軍との共同行動を求めてポーランド軍代表が来日している。また第二次大戦前の時期においても、日本とのつながりの強化を目ざしている。日本にとってポーランドは、どこか遠い、関係の薄い国であるが、ポーランドにとって日本は、ロシアの東の隣国であり、ポーランドの安全保障、政治問題と関連して具体的な研究の対象となってきたのである。

このような意味でヨーロッパにおいては、直接国境を接する隣国こそは最も危険な存在となりうるという格言が生きてくる。ロシア、ウクライナ、リトワニア、ドイツ、南ではチェコスロヴァキアと、ポーランドとその周辺諸国を例にとれば、いずれも対立関係が存在してきた。ドイツとフランス、フランスとイギリス、フランスとイタリアという隣国同志の諸国家間にもこの関係はあてはまる。このため隣の隣の国が友好国となる。つまりポーランドにとって友好国となりうる諸国は、フランス、イタリア、ルーマニア、ハンガリー、更に東では日本である。現在、世界から注目をうけているポーランドの労働組合「連帯」のワレサ議長がイタリアを訪問し、次いで

日本を訪れる予定というのは、このような事情を反映しているとは考えられないだろうか。

さて以上のような情況を考慮しつつ日本のおかれている地理的、政治的状態を眺めると、国境を直接に接してはいないのではあるが、日本の東の隣国アメリカ、西の隣国の一つ中国との関係はどのように理解されるであろうか。アメリカにとっての隣国、隣の隣、日本にとってのまた中国にとってのそれは、一体どの国のことであろうか。

（つづく）

（まつかわ　かつひこ・京都産業大学専任講師）

ワルシャワ

二十歳にして心朽ちたり

粕谷一希著
新潮社　1200円

昭和十四、五年ごろにはすでに戦時色を強め、国家主義的な雰囲気がかもしだされていたというが、一高という特殊な場所にはこの風潮は浸透していないかのようだ。なぜならば遠藤麟一朗という早熟な才能を花開かせた場所であるからだ。

遠藤麟一朗――みんなから遠麟とよばれ、「世代」という総合雑誌の初代編集長を務め、住友銀行で労働運動をやり、最後にアラビア石油調整室長の肩書きのまま死んでいった人――といえば、一般的な男の人生といえるかもしれないが、本書の著者は、遠麟を限りない憧憬をもって、彼の一生をおっている。

特に一高という開放された教育の中における遠麟の姿は、後半の彼の荒れた生活と裏はらに生き生きと描かれている。一高時代の彼は常に、高貴でダンディであったということに、すべてが集約できるといっても過言ではあるまい。後半の生活は彼にとっては〝つけたし〟なのであり、一高時代の彼がまさしく本当の彼であるといえば語弊があるだろうか。

それにしても、この原題である、「二十歳にして心朽ちたり」とはなかなか的を得たことばである。彼はやはり〝早すぎた世代〟に属する人間であったのだろうか。

(H)

精神分析を学ぶ

前田重治編
小川捷之
有斐閣選書　1700円

現在のアメリカにおいてなくてはならないものは精神科医なのだそうだ。映画「普通の人々」の中においても精神科医の役割は絶大なもので、〝病めるアメリカ〟を象徴しているかのように見える。

また、アメリカにおいてさえ、いや日本でさえ、右を向いても左を向いても物があふれて、すべての面で満足しているはずなのに、ふとなにげない拍子に心のすきまにふきこむ風を感じる。

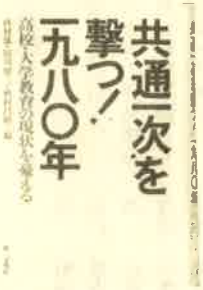
本書「精神分析を学ぶ」は、精神分析の入門書といっていいだろう。たとえば誰にでもあることだと思うが、何回書いてもいつも同じ所で書き損いをしたことを、本人が気づかないで意識から閉め出されている意図――抑圧された感情や願望――が意識や行動面へ突出した行為なのだという風にわかりやすく、数々の事例をひきあいに出して説明している。

しかし、この本を読んだからといって、臨床心理一般を理解できるわけではない。反対に、精神分析がいかに深層で、すその広い領域であるのかを、まざまざと見せつけられるだろう。

また、この広大なコスモ的な学問の中に、すき間風をくいとめる鍵があるかどうかわからないが、ともかく一読の価値のある本だ。(H)

共通一次を撃つ

田川建三
杉村昌昭 著
第三文明社　2300円



共通一次試験も、今年で三年目を迎えるという。

この制度については、当初から数々の批判が、マスコミ、高等教育現場からなされて来た。が、その批判の多くは、五教科七科目という科目数の負担増、科目による難易格差、試験時期の早さ等々に集中しており、共通一次の持つ本当の恐しさについては、数多く議論されていないように思われる。

本書は、その共通一次試験の本質的恐しさともいえる、共通一次試験体制が持つ「知」の国家管理的体質を暴露している。この場合の「知」の管理とは、本書によれば、高校、大学教育における知性のあり方を国家の手のうちに握られる、ということを意味するだけではなく、ひいては社会全体における知性のあり方が操られるということを意味するのでもあるのである。

本書が、特に共通一次試験を受けられた方に読まれ、自分達が如何に恐しい教育を受けてきたのかを、これを機会に考えてもらいたいものである。

(K)

学びへの旅立ち

尾形　憲編著
時事通信社　1200円

本書は、筆者尾形憲氏がいる法政大学経済学部での、「教育経済論」という講義の記録をつづったものである。この講義の七九年度の履修要綱を見ると、この講義の内容は次のようになっている。

「小学校から大学に至るまでの現在の公教育は、多くの場合、種々雑多な無用の知識を詰め込みはしても、むしろ個々人をますます自立できない存在にしてしまっている。……（中略）……本講義は、こうした教育の現実のさまざまの矛盾を、日本資本主義の下部構造における特殊性といった視角から解明する。……」

大学がただのレジャー機関にすぎず、キャンパス内にはパスポート学生やモラトリアム学生が数多く輩出している現在、もう一度、「学ぶとは何か？」ということが問い直される必要があるのではないだろうか？　そういう意味で、本書の最後の項で筆者が述べている言葉「大学とか高校とかいうワク組みは、所詮人間が勝手につくったものでしかない。私たちはそういうワクを越えて、教育とは何か、学ぶとは何か、それを通して人間が生きるとはどういうことか、そうしたいわば原点に立ち戻ることが、今要求されているのではなかろうか。」は肝に銘じられるべきだろう。

(K)

書評・バックナンバー 掲載論文一覧

第45号 '76・11

■評論 選別機構としての大学 田中 欣和
現代心理学の苦悩 田中 俊也
独占・財閥・大企業 結城良／訳
■連載 日中文化関係史の一面(27)増田 渉
研究余滴ランボー(7) 山村 嘉己

第46号 '77・5

■評論 在日朝鮮人教育について 李 明淑
障害者差別の現実 山口 梨季
■書評 「第三世界の経済構造」 西 行雄
「近代日本の知識人」 渡辺 幸博
「科学的知の構造」 田中 俊也
■追悼増田渉
弔辞 鳥井 克之
増田先生の思い出 編集部
■連載 日中文化関係史の一面(28)増田 渉
詩の翻訳について(8) 山村 嘉己

第47号 '78・4

■評論 施設解体！ ―「障害者」解放闘争の更なる飛躍を克ち取るために― 社会福祉研究会
■教官アンケート〈読書〉への招待 浅田 和茂 他
■連載 ランボー研究余滴(9) 山村 嘉己

第48号 '78・10

■講演録「彼はなぜ韓国へ渡ったのか」 桑原 重夫
■評論 ことばの社会性 田宮 武
■書評 『近代日本の精神構造』 竹内 洋
■連載 ランボー研究余滴(10) 山村 嘉己

第49号 '79・4

■評論 やさしさ世代考 竹内 洋
読書の方法 平田 重和
書物とのつきあい 市川 訓敏
■特別寄稿 芝居のすすめ 古賀 勝行
■対談 芝居のすすめ／杼麻 司由
■コラム 自動律の分度器 北沢 純一
ドール 泉 良樹
■連載 ランボー研究余滴(11) 山村 嘉己

第50号 '79・11

■書評 「西学東漸と中国事情」 大庭 修
「僕って何」 沢野 光路

■コラム
本屋あれこれ 石田 信博
今読まれている本 書籍部
私の西部劇小論 倉持 隆
今現実をとりかえせ 筑紫毛切郎

■連載 ランボー研究余滴(12) 山村 嘉己

第51号 '80・4

■評論 ワンパターンに かたよらない日本人論中農 晶三
甘えの世代と沈潜の文学吉田 永宏
日本の大学とドイツの 大学生についてD・シャウ ベッカー

■書評 「ユースカルチャー史」 竹内 洋
「経済学批判と弁証法」 竹内 良知

■コラム映画はだれのものか 松山 秋邦

■連載 ランボー研究余滴(13) 山村 嘉己

第52号 '80・6

■評論 サルトルと現代 渡辺 幸博

■書評 「サルトルの哲学」 川神 伝弘
「崩解感覚」 小田 実篤
「廻廊にて」 小田 実篤

■連載
研究余滴ボードレール(1) 山村 嘉己
日本中国 言葉の来往(1) 芝田 稔
差別落書問題 をめぐって(1) 田宮 武

■評論 「―書評―『筑波大学』に対する反論」 天六公開自主講座実行委員会
天六公開自主講座実行委員会の反論掲載にあたっての我々の視点 編集部

■連載
研究余滴ボードレール(2) 山村 嘉己
日本中国 言葉の来往(3) 芝田 稔
北京で生活して(2) 鳥井 克之

第53号 '80・9

■書評 「筑波大学」 円尾 健
「時計じかけの オレンジ」 荒木 倫子

■連載
差別落書問題 をめぐって(2) 田宮 武
日本中国 言葉の来往(2) 芝田 稔
北京で生活して(1) 鳥井 克之

第54号 '80・11

■書評 「裁かれる大学」 小川 雅也
「江戸時代の日中秘話」 泉 澄一
「楢山節考」 江崎 明

お知らせ

編集委員募集

書評運動は、生協運動の一環である教育・文化活動を担って発展してきました。しかし、現在の文化が、画一化・既成化される中で、独自の文化活動を完遂させなければならないのにかかわらず、編集委員不足という物質的な絶対的不足とそれにも増しての編集委員の力量不足が相乗的に重なってしまい、満足のいける活動はできていません。

そこで書評編集委員を募集したいと思います。現在の閉ざされた暗黒の文化情況に少しでも独自の文化の火を点したいと思っている方、あるいは新たな文化運動、思想運動の必要を感じている方、編集の仕事を手伝いたいと思っている方、是非書評編集委員会においで下さい。私たちは諸君に自由で、創造的な活動の場を提供したいと思います。

なお、書評編集委員会の活動は、書評誌の定期刊行化はもちろんのことですが、講演会、映画会の開催等の、広範な文化・思想活動を形成しようと考えています。

書評編集委員会は、読者の積極的参加を期待します。

投稿規程

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表論文、エッセイ等どのようなものでも結構ですし、書評誌の中の個々の作品に対する反論・批判等でもかまいま

せん。詳細については生協本館3F組織部内書評編集委員会まで直接にお問いあわせ下さい。

◈原稿は原則として縦書きで、1行25字、22行を1枚とします。

◈原稿には住所、氏名、学部、電話番号等連絡先を詳しく明記して下さい。

◈原稿は一切返却しません。必要な場合はコピーをとっておいて下さい。原稿の採否に関する問い合わせには一切応じません。採用分にはこちらから連絡します。

◈連絡先

〒565　吹田市千里山東3―10―1
関西大学生活協同組合「書評」編集委員会
電話　06―388―1121　内線4821

〈合評会に関するお知らせ〉

書評編集委員会では、ともすれば一方的になりがちな書評を、読者の意見・感想をとりあげた〝読者の参加する書評〟を目ざし、合評会を開催します。今後の読者の積極的参加を望みます。

連続セミナーの参加者を募集します。主催は、生協組織部と書評編集委員会の共催です。各回のセミナーの詳細は以下の通り。

第一回セミナー

テーマ…「私達の受けてきた教育とは何か」
時……四月十八日(土)～十九日(日)
所……京都伏見勝林院（山村教授宅）
参加する先生方
山村　嘉己（仏文科教授）
小川　雅也（仏文科教授）
田中　欣和（教育学科教授）
費用……二千五百円（交通費、食事代、宿泊代込）
受付け場所
生協本部3F組織部にて（第二、三回ともここでやります。）
しめ切り…四月十四日(火)

第二回セミナー

テーマ…「現代文学論」
時……四月二十五日(土)～二十六日(日)
所……京都奥嵯峨

参加する先生方
小川　悟（独文科教授）
吉田　永宏（国文科助教授）
費用……二千五百円（交通費、食事代、宿泊代込）
受付け場所
第一回と同じ所
しめ切り…四月二十日（火）

第三回セミナー
テーマ：「学生運動とマスコミ」
時……五月二日（土）～三日（日）
所……京都大原野田家
参加する先生方
田宮　武（社会学部教授）
中農　晶三（社会学部教授）
小原　仁（社会学部専任講師）
費用……二千五百円（交通費、食事代、宿泊代込）
受付け場所
第一回、第二回と同じ所
しめ切り…四月二十八日（火）

編集後記

先日九十三歳で亡くなられた荒畑寒村氏は、なんと十六歳の若さで社会主義運動の道に身を投じ、以来七十年以上も一環して社会主義という平担でない道を歩まれてきた。この闘志たるやそれは目をみはるものであった。これに対し、私たちは、満足に乳離れもせず、いつも優柔不断な態度で、目的をはっきりと持たず、いや、わざと避けるように生きていたといっても何の不思議もない。目的なしで生きることが目的だといえば、あまりにむなしい。

書評編集委員会では、ここで新人生特集号として、読書案内、文学入門、講演会記録を載せたが、何かを啓示する何かを啓発する契機となるべく要因を含んでいれば、と思う。

次号からも、目的意識的に特集を企画している。次号では教育問題を再度とりあげ、たとえば共通一次についても考察するなど、深くほりさげていってみたいと思っている。次号に御期待を！

1981年4月号　通巻55号

編集・発行　関西大学生活協同組合・組織部「書評」編集委員会
連　絡　先　吹田市千里山東3-10-1（☎388－1121　内線 4821）
頒　　価　250円